

『日本洞上聯燈録』の研究 (三)

——卷第七所収諸伝訓注(その二)——

近世洞門研究班

晴山 俊英 岩永 正晴 塚田 博

井上重葉子 駒ヶ嶺法子

はじめに

本研究は、嶺南秀恕(一六七五—一七五二)が編んだ『日本洞上聯燈録』(以下『聯燈録』)を通読し、訓注を試みるものである。

前稿(『駒澤大学禪研究所年報』第十六号所収)では、卷七所収の七師の伝、すなわち茂林芝繁法嗣の盧獄洞都伝までの訓注を報告することができた。本稿ではその後を受け、茂林の法嗣崇芝性岱から、川僧慧済の法嗣石宙永珊まで、計七師の伝に訓注を作成し報告するものである。

また本稿には、塚田博「嶺南秀恕の『日本洞上聯燈録』編纂姿勢の側面——崇芝性岱伝を素材として——」を附載した。崇芝性岱伝の検討中に、『聯燈録』編纂における嶺南の傾向、

即ち、複数系統の師承関係を有する諸師の扱いに関して一定の見通しを得たため、原案作成者である塚田がこれを論文にまとめたものである。本論により、今後の研究の方向性の一端を示すことができるものと考ええる。

本研究の参加者は、晴山俊英(宗学)、塚田博(日本中世史)、井上重葉子(日本近世史)、駒ヶ嶺法子(禅学)、岩永正晴(宗学)の五名であり、前回の通りである。参加者全員が分担して原案を作り、全員で検討を加え原稿を作成した。また、本研究は、駒澤大学禅研究所の研究班の活動として行ったことも、前回と同じである。

なお、本稿において貴重な資料の使用を御許可下さった一雲斎、浄牧院、長松院、洞松寺の各関係者の皆さま、ならびに影印の使用を認め、便宜をおかり下さった曹洞宗文化財

調査委員会、また、貴重な御教示を頂いた本学文学部教授廣瀬良弘氏に対し御礼申し上げます。

目次

はじめに

目次

訓註凡例

巻第七所収諸伝訓註 (その二)

永平下第十世

洞松茂林芝茂禪師法嗣

8. 遠州龍門山石雲院崇芝性岱禪師

9. 石州永明秀峰繁俊禪師

洞松靈嶽洞源法嗣

10. 濃州開元院月泉性印禪師

11. 遠州一雲大年祥椿禪師

12. 江州洞寿院以翼長佑禪師

13. 尾州乾坤院逆翁宗順禪師

14. 遠州長松院石宙永珊禪師

※算用数字を附した七師の伝に訓註を施した。

附論、嶺南秀恕の『日本洞上聯燈録』編纂姿勢の一側面

——崇芝性岱伝を素材として——

訓註凡例

一、本研究は『日本洞上聯燈録』（十二巻十三冊、以下『聯燈録』）の読解を目的とし、訓註を試みるものである。底本には駒澤大学図書館所蔵の寛保二年（一七四二）刊本（駒図一四・三七）を用いた。その際、いずれも同本を底本とするものではあるが、明治十八年刊行の大内青巒校訂本、及び『曹洞宗全書』『史伝上』所収本を参照した。

二、本研究の第二回報告となる本稿では、「永平下第十世」の諸伝を収める巻第七のうち、八番目に列せられる崇芝性岱より、十四番目に列せられる石宙永珊までの伝に訓註を施した。

三、本稿では本文を掲げ、訓読文を示し、註を記した。但し底本には改行がなくても、検討の上で適宜に段落を設けた場合もあり、その際には段落毎に本文・訓読・註記を揚げた。

四、本文は、便宜的に『曹全』の頁・段によってその所在を示し、訓読に応じて句点を附した。

五、本文は、原則として正字で表記したため、異体字・俗字・書写体と思われるものも断りなく改めた。但し、『聯燈録』の性格上、対校すべき異本がないため、検討の結果として底本の誤りと思われる文字を改める場合は

その旨を註記した。また、『曹全』の誤字はその都度註記した。

七、訓読に際しては、底本の訓点を尊重し底本の示す文意の把握につとめる立場をとった。検討の上改めた場合もあるが、その際には変更をその都度註記した。

六、訓読文は、原則として常用漢字及び現在通用の文字で表記し、句読点を附した。また、難読と思われるものには振り仮名を振った。なお、底本が有する振り仮名は出来るだけ採用した。

八、註記は、訓読文に各序類跋毎に（或いは各段落毎に）註番号を振り、その註番号に従って施註した。また、註記に他の資料を引用する際には、常用漢字及び現在通用の文字を用いた。

卷第七所収諸伝訓注（その二）

8. 崇芝性岱禪師

〔曹全〕「史伝上」三六九頁下段―三七〇頁上段

洞松茂林芝繁禪師法嗣（承前）

遠州龍門山石雲院崇芝性岱禪師。參州人也。早有絶塵之趣。十歳依教菴主。習般若心經。一夜已暗誦了。問菴主曰。般若

以何爲體。主驚異曰。子非吾弟子也。遂誘往遠之大洞。俾見喜山讚公。讚一見大欣云。是兒非常人相。指禮如仲和尚得度。時十四歳矣。

泊山歸備洞松。携師往。晝夜孜孜精勤十餘年。密契心地。喜山一日記曰。吾輪下學徒不少。而堪荷負大法者。惟汝耳。汝其懋哉。翌年山入滅。自此歷遊諸方。參月因於石之永明。一見大稱譽之。乃要授心印。師堅辭歸洞松。時茂林據席。喜師至曰。岱書記宗門眞種。麟而翼者也。久之機語投合。文安己巳林令師入室。付衣法嗣席住持。

康正乙亥歳。謝事東游。抵遠州高尾山得地利號龍門山石雲院。雲納踵至充三千指。郡將葛^{かつ}役^{また}氏寄附田産。影不出山者三十餘年。明應五年十月廿七日長逝。壽八十三。臘六十九。法嗣有七人。

〔訓読〕

遠州龍門山石雲院^①、崇芝性岱禪師^②は參州^③の人なり。早とに絶塵^④の趣有り。十歳にして教庵主^⑤に依りて般若心經を習う。一夜已に暗誦^⑥了て庵主に問て曰く、「般若何を以て体となすや。」主驚異して曰く、「子は吾が弟子にあらざるなり。」遂に誘いて遠の大洞^⑦に往きて、喜山讚公^⑧に見えしむ。讚一見して大いに欣びて云く、「是の兄常人の相にあらず。」指して如仲和尚を礼して得度せしむ。時に十四歳なり。

山の備の洞松に帰すに泊^{およ}んで、師を携えて往く。昼夜孜^し孜として精勤すること十余年、密に心地に契^{くわ}う。喜山一日記して曰く。「吾が輪下学徒少なからずして、大法を荷負するに堪えたる者は、惟だ汝のみ。汝其れ懋^{もつ}めよ。」翌年山入滅す。此れより諸方にし歴遊し、月因に石の永明に參^{まゐ}ず。一見して大いにこれを称譽す。乃ち心印を授けんとを要す。師堅く辞して洞松に帰す。時に茂林、席に拠る。師の至るを喜びて曰く、「岱書記は宗門の真種なり。麟にして翼ある者なり。」久しくして機語投合す。文安己巳¹⁷。林、師を入室せしめ、衣法を付し席を嗣¹⁹して住持せしむ。

康正乙亥の歲、事を謝して東游す。遠州高尾山²⁰に抵^{いた}りて、地を得て刹^{しや}を刼^けめ、龍門山石雲院と号す。雲納^{うんな}踵^{しん}至りて三千指に充^みつ。郡將葛^{かつ}氏^た、田産を寄附して、以て食^{じき}輪^{りん}を転^{てん}ず。影山を出でざることは三十余年。明応五年十月廿七日長逝す。寿八十三。臘六十九。法嗣七人有り。

〔註記〕

(1) 遠州龍門山石雲院……静岡県榛原町。山号は龍門山または高尾山。岡山県洞松寺(註8参照)末。寺伝によると、治承三年(一一七九)に、高倉上皇の勅願所として創建された真言宗寺院と伝えられる。のち北条時頼が寺基を定め、寺産を付したと伝えられるが、その後荒廃したという。したがって

崇芝性岱は中興開山とされる。開創は康正元年(一四五五)十月十七日と伝え、勝間田氏が寺領を寄進し伽藍を造営した。延徳三年(一四九一)から明治七年(一八七四)まで輪住制を敷く(註24参照)。戦国期には今川氏の外護を受け、江戸期には朱印地一五三石を有した。門葉七五〇ヶ寺を擁する如仲派の名刹。(参考文献「曹洞宗宗宝調査目録解題集1 東海管区編」曹洞宗事務庁、一九九一年、「日本歴史地名体系」第22巻静岡県の地名」平凡社、二〇〇〇年、「角川日本地名大辞典22静岡県」角川書店、一九八二年等)

(2) 崇芝性岱禪師……一四一四〜一四九六。歴住地は岡山県洞松寺五世、静岡県梅林院・同華嚴院・東京都淨牧院・埼玉県文殊院の各開山など(曹全「大系譜」)。崇芝性岱伝は『淨牧院聯燈録』『淨牧院記』『延宝伝燈録』九・『日域洞上諸祖伝』下等にも所載。なお、生没年は『聯燈録』『淨牧院聯燈録』『淨牧院記』の記述による。これらの諸本の崇芝性岱伝の異同ならびに比較検討については本稿附論「嶺南秀恕の『日本洞上聯燈録』編纂姿勢の側面―崇芝性岱伝を素材として―」を参照されたい。

(3) 參州……三州(三河国)。現在の愛知県東部。

(4) 早に絶塵の趣有り。……「絶塵」は俗世間から離れること。絶俗。

(5) 教庵主……未詳。禪宗ではない宗派、即ち教家寺院の主。

(6) 般若、何を以て体となすや……「般若」は慧・智慧。六波羅蜜のひとつであり、仏果を得るための最も重要な要素とされる。この問いは中国の燈史・語録に多出しており、枚挙に暇がない。

(7) 遠の大洞……遠江大洞院(静岡県森町)のこと。応永十八年(一四一一)、如仲天闇(註9参照)によって草創され、師・

梅山開本(？一四一七)を勧請開山とし自らは二世となった。開基は室町幕府四代將軍足利義持。太原派の派頭として約三千の末寺・孫末を有す。諸堂を完備する名利で、境内には森の石松の墓と清水次郎長の碑があることでも知られている。

- (8) 喜山讚公……喜山性讚(一二三七～一四四二)のこと。大洞院に如仲天閣(次註参照)を尋ね嗣法する。応永十九年(一四二二)、庄氏の外護を受け、舟木山洞松寺(岡山県矢掛町)を中興し、師如仲を請し自らは二世となった。以後示寂まで三十一年間住持する。ほかに總持寺百世・越前龍澤寺七世など。法嗣には茂林芝繁(註14参照)・靈巖洞源らがいる(『聯燈録』五・「重統日域洞上諸祖伝」二・「曹全」[「大系譜」を参照]。なお、洞松寺には、岡山県重要文化財に指定されている木造伝喜山性讚坐像・木造伝如仲天閣坐像(ともに室町期)がある。

- (9) 指して如仲和尚を……版本の訓読に従うと、「指して如仲和尚を礼して得度す。」となるが、文意から判断して「せしむ」と読み改めた。「如仲」は如仲天閣(「怒中」とも一三六五～一四四〇、一説に一四三七)のこと。上田(長野県)の人。梅山開本の法嗣。近江(滋賀県)に洞春庵、次いで洞寿院を開く。応永十八年(一四一一)、遠江に庵を構えて締巨院と称し、後に大洞院と改めた。後に總持寺に出世。法嗣には喜山性讚(註8参照)・月因性初(註12参照)らがいる。如仲の伝記は、『聯燈録』四のほかに「日域洞上諸祖伝」下、『延宝伝燈録』八に収録されている。

- (10) 山の備の洞松に帰す……「山」は喜山性讚のこと。「備の洞松」は備中洞松寺を指す(註8参照)。

- (11) 昼夜孜孜として……「孜孜」はつとめておこなうさま。

『日本洞上聯燈録』の研究(三)(近世洞門研究班)

「心地」は、心は一切法・一切功德を生じ増長させること、大地が草木百穀を増長させるようであるから、心を地にたとえて心地という。

- (12) 月因の石の永明に参す……「月因」は月因性初(？一四三三)、「石の永明」は石見の永明寺(島根県津和野町、本稿「秀峰繁俊章」を参照)を指す。月因は如仲天閣(註9参照)の法嗣。応永七年(一四〇〇)に吉見頼弘に請せられて永明寺を開く(『聯燈録』五)。月因は永享五年(一四三三)示寂であり、崇芝の永明寺歴遊が喜山示寂後(一四四二年)のことなので、『聯燈録』の記述は年代的に矛盾が生ずる。

- (13) 心印……『禅学大辞典』には、「仏心印の略。印は印可・印証で、師と弟子との心が相契合し、不二一体となることをいう。仏の拈華を摩訶迦葉が微笑することによって仏心を印証され、それが歴代の祖師を通じ、以心伝心によって伝えられてきた。その印可印証された仏心を仏心印または心印といい、仏の自内証の心地を指す。」とある。

- (14) 茂林……茂林芝繁(一二九三～一四八七)。肥後(熊本県)の人。大洞院如仲天閣(註9参照)、次いで喜山性讚(註8参照)に参じ法嗣となる。洞松寺(註8参照)、大洞院(註7参照)に住した後、長禄三年(一四五九)に總持寺に出世する。茂林の伝記は、『聯燈録』六のほかに「日域洞上諸祖伝」下、『淨牧院聯燈録』、『延宝伝燈録』九に収録されている。

- (15) 岱書記は……「岱」は崇芝性岱。「書記」は禅院における六頭首の一つで、書状などの製作に携わる役職。崇芝が書記を勤めた記述は、『聯燈録』のみに見られる。
- 「麟」は伝説上の神獣の麒麟。翼を持った麒麟である、と崇芝を称賛した言葉。なお、「麟」一文字で「ひかりあきらかなこと」の意もある。

(16) 久しくして機語投合す……崇芝の修行者としての力・はらたき(機)を示すことは茂林の縁に契い、認められたこと。機縁が契ったこと。

(17) 文安己巳……文安六年(一四四九)。

(18) 林、師を入室せしめ……「林」は「茂林芝繁(註14参照)」のこと。この時住持した寺院については、『聯燈録』の文脈からは洞松寺ともとれるが、崇芝諸伝等を総合的に考察すると、『淨牧院記』に見える「上州館林茂林寺」が妥当だと考えられる(本稿附論註13参照)。

(19) 康正乙亥の歳……康正元年(一四五五)。

(20) 遠州高尾山……静岡県榛原町。石雲院は高尾山麓にある。

(21) 雲衲踵至りて三千指に充つ。……多くの雲水が集まって修行をしている様子を指す。「三千指」は夥しい数を表す表現。

(22) 郡将葛役氏……勝間田氏・勝田氏とも。石雲院に近接する勝田庄および勝間田城(静岡県榛原町)を本拠とした。源頼朝以来の有力御家人として鎌倉幕府に仕えていたことが『吾妻鏡』等に見える。室町期には奉公衆として室町幕府に仕え、石雲院開創の頃は、遠江の有力な国人領主に成長していた。文明九年(一四七七)、勝間田氏は横地氏とともに、遠江守護斯波氏と結び、遠江に進攻するに今川義忠に抗したが破れ、勝間田城は落城した。しかし直後に勝間田・横地の残党が帰陣途中の義忠を塩買坂(静岡県御前崎市)で討ち取ったという(『今川家略記』『今川家譜』等)。この頃の勝間田氏に勝田修理亮なる人物が見える(『親元日記』)。石雲院開基の勝間田氏の一族であると思われる。また、鎌倉・室町期にかけて、勝間田氏の時宗への帰依が知られ、榛原町域の時宗道場の展開との密接な関連が想定されている。

なお、現在も石雲院の南西には勝間田城址(静岡県指定史

跡)が残り、付近には勝田・勝間田の地名や、勝間田川がある。(参考文献『日本歴史地名体系 第22巻 静岡県の地名』平凡社、二〇〇〇年、『角川日本地名大辞典22静岡県』角川書店、一九八二年、『静岡県史 通史編二 中世』一九九七年等)

(23) 食輪を転ず……「食輪」は出家者が在家者の供養によつて食を満たすこと。二輪のひとつで法輪と対をなす。『摩訶僧祇律』三五(大正二二、五一上)に「得食輪已乃転法輪(食輪を得おわりて、いまし法輪を転ぜん)」とある。また、外護者の寄進等による禅院の維持経営も意味する。ここでは後者。

(24) 影、山を出でざることは三十余年……「影」は姿のこと。崇芝は石雲院開創以来、三十余年間、山から出ることはなかったとする。この記述は『聯燈録』のみに見られる。崇芝の石雲院開創の事績を強調するものであり、崇芝伝の成立ならびに『聯燈録』の性格を考える上で重要な示唆を与えてくれる(本稿附論註12参照)。

三十余年とは、延徳三年(一四九一)、崇芝が石雲院に輪番を定め、隠退した時までを指していると思われる(『淨牧院聯燈録』『淨牧院記』)。

石雲院に輪番を定めた置文を以下に記す。

龍門山石雲院置文之事

右石雲院住持職輪番次第之事。於我存命時。如申渡。老僧絶息之後。亦臘次第可被住者也。臨終之剋依被居遠国而及延引。則于老僧随逐之仁。不論臘之前後年老若。先可被任住持職者也。仍於寺家修造之事。於有之者。以寺領之土貢五分一。可被加小破修理者也。若及大破之修理。則以門中之品評。可被用土貢悉皆者也。以土貢五分一。并祠堂米之余盈。可用仏供

燈油者也。守我置文之堅旨無怠慢。則為老僧勝造立七宝塔者也乎。堅可守之々々者也。仍遺書旨如件也。

維時延德三辛亥歲正月廿八日 崇芝性岱在判

〔淨牧院聯燈錄〕〔淨牧院記〕より

(25) 明応五年……一四九六年

(26) 法嗣七人有リ……法嗣についての記述があるのはほかに『日域洞上諸祖伝』があり、「嗣法一人。大空玄虎。」とある。

『聯燈錄』七卷末の「考証」に、「一、崇芝章諸祖伝曰嗣法一人誤也。師実出七子。」とある。『聯燈錄』卷八には、崇芝法嗣として、大空玄虎・賢仲繁哲・界巖繁越・季雲永獄・辰応性寅・大有良榮・隆溪繁紹の七名を立伝する。なお、『曹全』〔大系譜〕にはこのほかに、嚴芝性繁・海岸寛を載せる。

9. 秀峰繁俊禪師（曹全）〔史伝上〕三六九頁上〜下

石州永明秀峰繁俊禪師。本州津和野城主。吉見成頼子也。妙齡命齡捨家。入備中洞松寺。禮茂林繁禪師難度。久之承印記。出住永明。山門頗頽弊。乃力爲經度。田蕪者闢之。室圯者葺之。上堂。即心即佛脫體現成。非心非佛鶴子過新羅。不是心不是佛不是物。卓拄杖一下云。打刀須是邠州鐵。暮年舉禪菴補處。築大定院退處。永正五年戊辰十月三日委順。

〔訓読〕

石州永明、秀峰繁俊禪師^②、本州津和野の城主吉見成頼^③が子なり。妙齡にして家^⑤を捨て。備中洞松寺^⑥に入りて、茂林繁禪師^⑦を礼して難度^⑧す。久しくして印記^⑨を承け、出でて永明に住す。山門頗る頽弊^⑩す。乃ち力めて經度を爲す^⑪。田蕪れたるは之を闢き、室圯るるは之を葺く。

上堂。即心即佛、脱體現成。非心非仏、鶴子新羅を過ぐ。不是心不是仏不是物、拄杖を卓すること一下して云わく、刀を打つことは須らく是れ邠州の鉄なるべし^⑬。

暮年、禪菴^⑭を挙げて補処^⑮し、大定院^⑯を築きて退処^⑰す。永正五年戊辰十月三日、委順^⑱す。

〔註記〕

(1) 石州永明……石州は石見國。永明は覺皇山永明寺（島根県津和野町）。備中洞松寺末（洞松寺については「崇芝性岱章」註8参照、応永二十七年（一四二〇）吉見頼弘（？）一四四六）の開基、月因性初（？）一四三三。「崇芝性岱章」註12参照）が開創して師の如仲天闇（一三六五〜一四四〇）を開山第一世とする（『聯燈錄』五「月因性初章」、中島仁道『曹洞教団の形成とその発展』（一九八六年、曹洞宗大本山総持寺出版部）。吉見氏の菩提寺であつたとされるが、現在吉見氏の墓はない。『聯燈錄』五「月因性初章」では応永七年（一四〇〇）に吉見頼弘に請せられて開創したと伝えるが、『津和野町史』（沖本常吉編、一九七〇年、津和野町史刊行会）は、「寺伝その他ことごとく応永廿七年（一四二〇）頼弘の開基とする説に従

うべきであらう」としている。また『禪学大辞典』では月因の項で応永七年、永明寺の項で同二七年の開創としている。寺伝によると、天文年間の陶晴賢の兵火によって焼失、さらに慶長年間にも寺中残らず炎焼し、中世の事跡を直接伝えるものはほとんど残っており、今のところ開創年代を確認できる資料はない。

『津和野町史』は、永明寺関係の資料として、「寺伝」「永明寺過去帳」「永明寺末録」「永明寺開山二世三世伝」「太定院由緒」「永明寺開祖歴代年譜」(いずれも永明寺蔵)などを挙げている。

(2) 秀峰繁俊禪師……生年未詳、一〇月三日示寂。寂年については永正五年(一五〇八)と同一五年の二説がある。「太定院由緒」「永明寺過去帳」「舟木山洞松禪寺住山歴祖伝」(享保一六年、梅岳慧香撰、洞松寺所蔵。『曹全』『拾遺』所収)では秀峰繁俊の寂年を永正一五年としており、『聯燈録』の永正五年とは一〇年の開きがある。また『聯燈録』は吉見成頼の子としているが、『津和野町史』は「吉見家譜」の吉見頼弘の子、成頼の弟とする説を採っている。永明寺二世、広島功徳寺二世、福井竜沢寺五四世、岡山洞松寺七世、島根大定院(註15参照)・同昌谷寺開山(曹洞宗曹洞宗文化財調査目録解題集等)。「舟木山洞松禪寺住山歴祖伝」によれば、洞松寺の茂林芝繁に参じた後に猿懸城畔に見性寺を築いたという。

秀峰繁俊の伝は聯燈録の外、「舟木山洞松禪寺住山歴祖伝」と「永明寺開山二世三世伝」にある。

《参考資料》(舟木山洞松禪寺住山歴祖伝)所収)

当山伝灯前住秀峰繁俊禪師永正十一年世見性開山。師諱繁俊。字秀峰。長州之産。吉見氏之子也。度縁僅失其考焉。游

方而偶見三洞松茂林禪師。親參詳入堂奥矣。視地於猿懸城畔。築見性寺。誦侶奔走。而德望一時高矣。蒙林師之遺命。輪篆于本山。一回去又懇見性寺矣。曾長州刺史吉見三河守者。源家之庶流也。於大井郷。勸永明寺。使請二月因初公而為中演法焉。吉見氏物故。而号大年道珍居士。其子葉文龜永正之間。移居於石州三松本。寺又從事焉。今之津和野永明寺是也。師以爲同族。請而令開法。依此称中興開基焉。嗣子四員。曰禪庵。曰德翁。曰全翁。曰祖超也。囑後事於禪庵興。而戢化畢。永正十五年戊寅十月三日示寂矣。永明回録數回。語録等尽煨燼。永明寺者。月因初公創開之地歟。故今称開山。雖然法系依師而嗣統。永明中興開山之称必矣。

(3) 津和野の城主……津和野城址は石見国西部、島根県鹿足郡津和野町後田に存する。国指定史跡(一九四二年指定)。別名落城、藁吾(つわぶき・たぐ)城、中世吉見氏時代には一本松城、三本松城とも称した。吉見頼行(?-一三三六)が蒙古襲来に備え石見国に下向し、永仁三年から正中元年(一二九五-一三三四)の間に築城し、以後三〇〇年余り、一四代にわたって吉見氏が本拠とした。(角川書店『日本地名大辞典32島根県』、平凡社『島根県の地名』、山陰中央新報社『島根県大百科辞典』)

(4) 吉見成頼……石見吉見氏(後の大野毛利家)は初代津和野城主である吉見頼行を祖とし、成頼はその七代目にあたる。吉見家中興といわれた津和野城主五代頼弘の子。三河守を称し、寛正六年(一四六五)前後には室町幕府に仕えていたとされる(『津和野町史』)。

(5) 妙齡にして家を捨つ……「妙齡」は年齢の若いこと。こゝ

では年若くして出家したことをのみを言っており、正確な年代は未詳。

(6) 備中洞松寺……「崇芝性岱章」註8参照。

(7) 茂林繁禪師……「崇芝性岱章」註14参照。

(8) 薙度……剃度（剃髮得度）に同じ。

(9) 久しくして印記を承け……長く時が経ってから印記を受けた。「印記」は、ここでは「記別」を受けたという意味ではなく、「印可」（印信許可の意。師が弟子の悟徹を認証すること）のことか。

(10) 山門頗る類弊す……永明寺開山月因性初が嗣子のないまま永享五年（一四三三）に示寂した後、秀峰繁俊が二世として入寺するまで、永明寺は無住の状態が続き、その間に荒廃したものと思われる。秀峰繁俊が永明寺に入寺した時期は明らかではないが、「吉見家譜」には「永明寺ハ文明十一年成頼公ノ御代ニ建立也」とあり（『津和野町史』）、永明寺開創がこの年ではないにしても、このときに成頼と繁俊によって中興された可能性がある。あるいは前掲「舟木山洞松禪寺住山歴祖伝」では、永明寺開基の吉見頼弘が没した後、その子孫（成頼の子、頼興（一四六〇～一五三二）のことか）が文龜・永正の間（一五〇一～一五二二）に三本松（津和野城）に居を移した際に寺もこれに従って今の津和野永明寺となったとしていることから、この移転先が荒廃していたことも考えられる。

(11) 経度……『辞源』（合訂本、一九九八年、商務印書館出版）は、経営のこととする。

(12) 上堂。即心即仏……「即心即仏」「非心非仏」「不是心不是仏不是物」は、いずれも馬祖道一の語。例えば『五燈会元』三「伏牛山自在禪師章」（統蔵第一三八冊一〇九頁下）に「国

師（南陽慧忠）曰、馬大師以何法示徒。曰、即心即仏。国師曰、是甚麼語話。良久又問曰、此外更有何言教。師曰、非心非仏、或曰不是心、不是仏、不是物」とある。この三語に各々著語をつける形式の上堂は中国禅籍にまみ見られる。こどもその形式にならない、この三語をいわゆる曹洞三位（自己・智不到・那辺）にかけて解釈したものか。

(13) 禅菴……生年未詳、天文一〇年（一五四一）一〇月八日寂。永明寺三世禅菴繁興。島根興海寺・同永大院・同永乗寺、岡山長松寺・同瑞雲寺、同威徳寺・同上合寺を開山、同洞松寺一五世。

禅菴繁興の伝は『聯燈録』にはなく、「永明寺開山二世三世伝」と「舟木山洞松禪寺住山歴祖伝」に見られる。

《参考資料》

「禅庵繁興伝」

師諱繁興、字禅菴也、伊州橘氏子也焉。尋_二舟木茂林_一禪師、親參究、発_二明己事_一而、被_レ安_二名焉_一、尋_二見秀峰_一禪師而、探_二宗門之堂奥_一、去_レ廬_二竜王山下_一、三禪諱々扶_二起宗乘_一、一夜夢_二白山権現_一、駕_二乗亀形_一而、来_二師之寢室_一、依_二之祈_一将来護法之加被力而、手築_二鎮守壇_一於亀形、設_二社於其背上_一、蓋欲_二令_二法久住也_一、亀山之壇今尚存而、為_二寺門之大護法_一焉、今之竜王山瑞雲寺是、後創建于西方郷長松寺、大唱_二宗猷_一焉、受_二秀峰顧命_一、視_二篆於洞松_一、法灯益盛、輪任已充、莅_二永明_一菴、見性又帰、住_二長松_一、付_二法於東菴公_一而遷化、于時天文十年辛酉十月初八日也

（『津和野町史』所収「永明寺開山二世三世伝」より）

『日本洞上聯燈録』の研究(三)(近世洞門研究班)

一四六

当山伝灯前住禪庵繁興禪師伝永正十一年開山

師諱繁興。禪庵其号也。未詳_二姓族何処人_一。古來失_二其記_一焉。曾謁_二于舟木茂林禪師_一。親參究。發_二明已事_一。而為被_レ安_レ名焉。尋見_二秀峰禪師_一。而探_二宗門堂奧_一。去廬_二竜王山下_一。諄諄扶_二起宗乘_一。一夜夢。白山権現駕_二乘靈龜_一而來。師寢室。依_二之祈_一。將來護法之加被力。而手築_二鎮守壇_一於龜形。設_二社於其背上_一。蓋欲_二令法久住_一也。龜形之壇。今尚存。而為_二寺門之大護法_一焉。今之竜王山瑞雲寺是也。後視_二處於西山之郷_一。創_二長松寺_一。大唱_二宗猷_一。受_二秀峰之顧命_一。視_二篆於洞松_一。法灯益盛也。輪任已充。莅_二永明_一。董_二見性_一。又歸住_二長松_一。付_二法於東庵益_一。而謝世矣。実天文十年辛丑十月初八日也。嗣法之徒三人。曰東庵。董_二瑞雲_一。曰普月。尸_二長松_一。曰大中。統_二永明_一。各法灯益旺。紹_二統宗乘_一矣。本山輪番之請疏。手書今尚所存。而在_二長松室中_一。

(14) 補処し……(弟子の禪庵繁興を)永明寺の後住として任命した。(舟木山洞松禪寺住山歴祖伝より)

(15) 大定院……後に永明寺末となるが、もとは永明寺塔頭として建てられた。開基は吉見成頼。島根県津和野町。

(16) 永正五年戊辰……一五〇八年。繁俊の寂年を永正一五年とする資料があることは註2に述べた通り。

(17) 委順す……自然のなりゆきにまかせること、または死を言う。ここでは、秀峰繁俊が示寂したこと。『稽古略』二に「謗_二祖於邑宰翟仲侃_一、翟罪_二於祖_一。祖乃委順、時年一百七歳。」とある。

10 月泉性印禪師

〔曹全〕「史伝上」三六九頁下(三七〇頁上)

洞松靈嶽洞源禪師法嗣

濃州開元院月泉性印禪師。洛陽官族大江氏子也。母某氏。孺于鞍馬多聞天有孕。以応永戊子正月念日生。時拳左手。逾三七日。果展之。出毘沙門金像。宗族称異。

自幼秀穎。經書過目輒成誦。偶見死屍九変相。神智渙發。父母察其志投叡山首楞嚴院。祝髮受具。深探顯密奥旨。充然若有所契。

竊慕禪徧參諸尊宿。過備中洞松。參喜山老人授以万法帰一話。服勤而載。山瀕没召師依靈嶽。嶽問曰。汝久參先師處。有何指示。師曰。万法帰一。嶽曰。汝如何会。師曰。南山雲起北山雨。嶽斥之。師拜求指的。嶽曰。吾這裏無涓滴。莫來湊泊。師擬開口。嶽劈口掌之。

久之辞去參諸方。首上永平。耕雲大洞無不蹈徧。造尾謁月江於楞嚴。過夏。到野口里結茅而居。無何避乱。入濃之日吉郷。見山川奇趣。欲老生於此。憑樹縛羅龜。澗飲木食以度日。永亨戊午三月入山趺坐。見月落澗泉。豁然領悟。徹見靈嶽之用處。往覲靈嶽。嶽迎笑曰。且喜。大事了畢。因称師號月泉。付以金欄袈裟。

永享^②己未。州守金吾源頼元〔土岐氏〕就其所栖。艸創梵刹。扁曰鷹巢山開元院。嘉吉癸亥。始開堂。拈香識靈嶽之嗣。有旨莅總持。尋謝事帰開元。文明二年庚申臘月將順世。喚洞爽囑後事。書偈而逝。是月廿八日也。寿六十三。臘五十三。奉全身塔于本山。嗣法盛禪。周牧。乾山。龍宗。玄正等。卓菴於本山東西羽翼祖庭焉。

(一) 内割註

〔訓読〕

洞松靈嶽洞源禪師法嗣

濃州開元院月泉性印^③禪師、洛陽の官族大江氏の子なり。母某氏、鞍馬の多聞天に誘て、孕こと有り。応永戊子正月念日を以て生る。時に左手を拳る。三七日を逾へ果して之を展べて、毘沙門の金像を出す。宗族^④、異と称す。

幼より秀穎なり。經書目を過れば輒ち誦を成す。偶ま死屍九変の相を見て、神智渙発す。父母其の志を察して、叡山の首楞嚴院に投じて、祝髮受具せしむ。深く顯密の奥旨を探りて、充然として契するところ有がごとし。

竊に禪を慕いて諸尊宿に徧參す。備中の洞松^⑤に過て、喜山老人に參じ、授くるに万法帰一^⑥の話を以てす。服勤両載、山、没するに瀕して師を召して靈嶽に依らしむ。嶽問うて曰く、「汝久しく先師の処に參ず。何の指示か有る。」師曰く、「万法帰一。」嶽曰く、「汝、如何が会す。」師曰く、「南山雲起り

北山は雨。」嶽之を斥く。師、拜して指的を求む。嶽曰く、「吾が這裏、涓滴無し。来りて湊泊すること莫かれ。」師、口を開んと擬するに嶽、劈口に之を掌す。

久くして之を辞し去て諸方に參ず。首め永平に上り、耕雲・大洞を蹈徧せずということ無し。尾に造きて月江に楞嚴に謁して、夏を過ぐす。野口里に到りて茅を結びて居す。何く無くして乱を避て、濃の日吉の郷に入り、山川の奇趣を見て、此に老生せんとを欲す。樹縛・蘿龕に憑り、澗飲木食し、以て日を度る。永享戊午三月、山に入り跏趺坐す。潤泉に月の落つるを見て、豁然として領悟す。靈嶽の用処に徹見す。往きて靈嶽に覲ゆ。嶽迎へ笑て曰く、「且喜すらくは、大事了畢せり。」因て師を称して月泉と号す。付するに金欄の袈裟を以てす。

永享己未、州守金吾源頼元〔土岐氏〕、其の所栖に就いて梵刹を草創して、扁して鷹巢山開元院と曰う。嘉吉癸亥、始めて開堂す。拈香し靈嶽の嗣を識る。旨有りて總持に莅む。尋て事を謝して開元に帰す。文明二年庚申の臘月、將に順世せんとす。洞爽^⑦を喚びて後事を囑す。偈を書して逝す。是の月廿八日なり。寿六十三、臘五十三、全身を奉じて本山に塔す。嗣法の、盛禪、周牧、乾山、龍宗、玄正等、庵を本山の東西に卓て祖庭を羽翼す。

(一) 内割註

〔註記〕

(1) 洞松……岡山県舟木山洞松寺のこと。本稿「崇芝性岱章」註8参照。

(2) 靈獄洞源……寂年については、『曹洞宗文化財調査目録解題集』4「中国・四国管区編」(一九九七刊(以下「曹洞宗文化財調査目録解題集」を「解題集」と略す)参照)に一四五八年説と一四九一年説の二つがある。總持寺二五五世、岡山洞松寺四世、同円幢寺開山、同全応寺開山、愛知福嚴寺開山、福井龍澤寺十六世である。なお、靈獄の行状は、『重統日域洞上諸祖伝』(「聯燈録」(曹全)「史伝」所収)、舟木山洞松禪寺住山歴祖伝(「曹全」拾遺)所収、「幽谷余韻抄」(統曹全)「統語録三」所収、「延宝伝燈録」等に見える。

(3) 濃州開元院……岐阜県瑞浪市の鷹巣山開元院のこと。

(4) 月泉性印……月泉性印(一四〇八―一四七〇)は、岡山洞松寺六世、愛知福嚴寺(宝積寺)二世、岐阜開元院開山である。なお、洞松寺では、五世崇芝性岱(本稿「崇芝性岱章」参照)以降、明暦年間(一六五五―一六五八)まで輪住制が敷かれる。

月泉の伝記は『聯燈録』の他に、『月泉性印禪師行状記』(愛知福嚴寺所蔵)、『洞松寺住山記』乾巻所収「舟木山洞松禪寺輪次住山記」(岡山洞松寺所蔵、註13参照)、『延宝伝燈録』九(曹全)「統史伝」所収、『日域洞上諸祖伝』下(曹全)「史伝」収録、で知ることができる。また、嶺南以降に書かれた月泉の行状は、『永福面山和尚広録』(一七七三年、「曹全」語録三)収録、『幽谷余韻抄』にみることができる。

『延宝伝燈録』、『日域洞上諸祖伝』と『聯燈録』の記述を比較してみる(本稿附論「嶺南秀恕の『日本洞上聯燈録』編纂姿勢の側面―崇芝性岱伝を素材として―」【表3】参照)と、

『延宝伝燈録』、『日域洞上諸祖伝』では、濃州の日吉、つまり開元院開創の土地に入る以前に領悟したとあるが、『聯燈録』では、入った後、永享戊午年(十、一四三八)以降に領悟したとしている(同附論の「三、月泉性印伝における事例」参照)

(5) 洛陽の官族大江氏の子なり……月泉の生まれについて、『日域洞上諸祖伝』下、『延宝伝燈録』九では「備中舟木人」とある。つまり、註4に挙げた文献に記される月泉の出身地について、『聯燈録』成立前の記録には備中(岡山)とあるが、『聯燈録』では、洛陽(京都)の官族大江氏との縁が説かれ、後代には、毘沙門天の生まれ変わりとされる記述が見られるようになる(註8、及び本稿附論【表3】参照)。

(6) 鞍馬多聞天……京都市左京区に所在する鞍馬寺本尊毘沙門天のこと。鞍馬寺と毘沙門天の関係は諸説ある。『鞍馬蓋寺縁起』には、宝龜元年(七七〇)、鑑真的弟子である鑑禎が白馬の導きで始めて鞍馬の地に上った折り、毘沙門天が顕現したと伝えられ草創とされており、藤原伊勢人の建立と伝える。また、『伊呂波字類抄』『今昔物語』『扶桑略記』『水鏡』『帝王編年記』『拾芥略要集』『濫觴抄』『本朝通鑑』などに記録された縁起には、七九六年に造東寺長官である藤原伊勢人の建立と伝え、観音の靈場を探していたところ毘沙門天に出会い、毘沙門天と観音が同体であると説き伏せられ、まつるようになったという、観音と結びつける伝がある。また、貧しい姫君を乳母が俱して、鞍馬の毘沙門天に参籠して果報を得ようとする話が、無住道曉(一二二六―一三一二)著『雑談集』(巻五・信智之徳事)にあることから、古くから鞍馬信仰が盛んであったことが分かる。(『福神信仰』(宮本袈裟夫編、戎光祥出版、一九八七)、『七福神信仰事典』(宮田登編、雄

山閣、一九九八）参照）

(7) 応永戊子正月念日……応永十五年（一四〇八）一月二十日

(8) 毘沙門の金像を出す……『聯燈録』において月泉と毘沙門天とが関係付けられた。『聯燈録』以降の文献、『永福面山和尚広録』『開元開山月泉和尚忌疏』には、「前身北方天王」とあり、毘沙門天の生まれ変わりを示す記述がみられる。

(9) 宗族……一族のこと。

(10) 死屍九変の相……人間の死骸が土灰に帰するまでの九段階の変相をいう。不浄観の一種としてこの変相を観察する修行が行われた。また、中世の五山において東坡居士蘇軾に仮託して「九相詩」が作成され、この各詩に図と和歌を配した「九相図」が流行したという（岩波文庫『玉造小町子壮哀書』附載「九相詩」および解題参照）。ここでは「九相図」の類を見たことをいうものか。

(11) 神智渙発……靈妙な智慧が盛んに発すること。ここでは、幼き月泉が「死屍九変の相」を見て道心を発したことをいうものか。

(12) 叡山の首楞嚴院……比叡山（滋賀県大津市）の三塔（東塔・西塔・横川）のひとつである横川の中心的な寺院で、円仁（七九四～八六四）の創建。この末に多数の房が存した。道元禪師も首楞嚴院下の般若谷千光坊に入り出家されたと伝えらる。

(13) 備中の洞松……洞松寺（岡山）のこと（本稿「崇芝性岱章」参照）。註4で月泉が洞松寺六世であることを挙げているが、『洞松寺住山記』乾巻に収録されている「舟木山洞松禪寺輪次住山記」（本稿附論参照）によれば、「当山前任第六世 月泉性印和尚（備中人事 靈嶽法嗣）住山年曆未詳。盖文正応仁之間。一回住歟。雖然住山古記順次如此。後來校正之。文

明二年庚寅十二月二十八日。先本師而遷化。嗣子二人開尾之福嚴濃之開元院。」（「内割注」とあり、文正応仁の間（一四六六～一四六八）に一度住したとある。

(14) 喜山老人……喜山性讚（二三七七～一四四二）のこと。「崇芝性岱章」参照。

(15) 万法帰一の話……「趙州万法帰一」または「趙州七斤布衫」と名づけられる公案を与えられた。この話は例えば『碧巖録』四五則の本則とされている（大正四八、一八二下）。

(16) 服勤兩載……「服勤」は骨折りの仕事に従いつとめることであり、「兩載」は二年間の意。つまり、喜山について二年間修行したということ。

(17) 南山雲起り北山は雨……『碧巖録』八三則「雲門露柱相交」に、「南山起雲、北山下雨」とある（大正四八、二〇九上）

(18) 涓滴……しずくのこと。極めて少ない喩え。

(19) 湊泊すること莫かれ……「湊泊」は船舶のこと。靈嶽が月泉に、みずからの下に居てはならぬと指示した。

(20) 擬……底本（寛保二年板本）の「擬」を、「曹全」「史伝」は「耕」に作る。

(21) 首め永平に上り……「永平」は、現福井県永平寺のこと。「耕雲」は、傑堂能勝により一三九四年に開創された、現新潟県村上市に所在する耕雲寺か。「大洞」は、「日域洞上諸祖伝」下「福嚴寺月泉印禪師伝」に、「文安二年（一四四五）源有遠州之行。師隨行。」（本稿附論「表3」参照）とあることから、静岡県周智郡森町に所在する大洞院のこと。この月泉は靈嶽の下を離れまず永平に、その後、耕雲、大洞等に限無く参じたの意。

(22) 月江に楞嚴に謁して……愛知県刈谷市に所在する神守山楞嚴寺の開山月江正文（一四六二寂）のこと。月江の行状は、

『日本洞上聯燈録』の研究(三)(近世洞門研究班)

一五〇

『日域洞上諸祖伝』下、『聯燈録』五、『補陀寺統伝記』『雙林寺聯燈録』に収録。

(23) 野口里に到りて茅を結て居す……「茅を結びて居す」とは庵居すること。「野口里」は『日域洞上諸祖伝』下「福嚴寺月泉印禪師伝」に「尾之野口里」とあり、またその地について「興改宝積號福嚴」とあることから、宝積寺(現在、愛知県小牧市の大叢山福嚴寺)のことと見られる。

(24) 濃の日吉の郷……開元院の開創地。註3参照。

(25) 樹縛・蘿龕に憑り……あるいは樹木を縛り束ねたばかりの庵に居し、あるいははつたかずらの絡む塔の石室に入り雨露を凌いだこと。

(26) 永享戊午三月……永享十年(一四三八)三月

(27) 永享己未……永享十一年(一四三九)

(28) 州守金吾源頼元(土岐氏)……「州守」は国司を指すと思われ、ここでは美濃守を務めた土岐氏のことであろう。土岐氏は清和源氏の流れを組む一族で、室町幕府の有力守護大名の一つ。美濃国を中心に勢力を広げ、美濃守、美濃国守護を歴任した。金吾は、衛門府の唐名。一般的には衛門督をさす。源頼元は土岐氏と考えられるが、当概期に頼元なる人物はみえず、この時期の美濃守は持益である。なお、持益の四代後に土岐頼元(一五四九―一六〇八)がいる。

(29) 嘉吉癸亥……嘉吉三年(一四四三)

(30) 文明二年庚申の臘月……一四七〇年十二月

(31) 洞爽……盛禪洞爽(一四三四―一五一八)。「曹全」「大系譜」によれば、岐阜開元院二世、兵庫妙仙寺開山、愛知福嚴寺二世、同龍拈寺開山である。盛禪の伝記は、『日域洞上諸祖伝』下、『聯燈録』八にみることができる。

(32) 盛禪、周牧、乾山、龍宗、玄正等を……月泉の嗣法には、

盛禪洞爽のほか、開元院の近く幸福庵に周牧三鼎、東光庵に乾山自耕、三陽庵に龍宗徳水、圭田庵に玄正自圓が住し、月泉の宗風の振宏をたすけたこと。

11 大年祥椿禪師(『曹全』『史伝上』三七〇頁上)

一雲川僧慧濟禪師法嗣

遠州一雲大年祥椿禪師。本州人。幼喪父母。甫十三歲慕出世法。下髮於山寺。欲報親恩誦法華。山有一大士。謂之曰。子才氣如斯。何匏繫於此。川僧禪師居一雲。子能就之定有所得。師聞之直造。謁問。如何是學人自己。僧曰。本來廓然清淨。曰。生死如何得脱。僧曰。誰縛汝。師忽淚下浹背。久之契深旨。師欲圖僧像。預索贊語。僧作圓相。題其上曰。維天有闕鍊石補。維月有虧以斧修。不修不補是甚麼。舜若多神咲點頭。嗣住一雲。升總持。永正癸酉四月四日寂。壽八十。

〔訓読〕

一雲川僧慧濟禪師法嗣

遠州一雲大年祥椿禪師、本州の人。幼にして父母を喪す。甫て十三歳、出世の法を慕いて、山寺に下髮す。親恩に報いんと欲して『法華』を誦す。山に一大士有り、之れに謂いて曰く、「子、才氣かくのごとし。何ぞ此に匏繫する。川僧禪師、一雲に居す。子、能く之れに就かは定んで所得有らん。」師、

之れを聞きて直に造り謁して問う、「如何なるか是れ学人の自己^⑩。」僧曰く、「本来廓然清淨^⑪。」曰く、「生死、如何が脱することを得ん^⑫。」僧曰く、「誰か汝を縛する。」師、忽ち涙下つて背に決る。久しうして深旨に契う。師、僧の像を図せんと欲して、預め賛語を索む。僧、円相を作して其の上に題して曰く、「維れ天、闕くこと有らば石を鍊つて補う、維れ月、虧くこと有らば斧を以て修す。修せず補せざる、是れ甚麼ぞ。舜若多神、咲いて点頭す。」嗣ぎて一雲に住し、總持に升る。永正癸酉四月四日寂す、寿八十。

〔註記〕

(1) 一雲……遠江国万世山一雲斎（現静岡県磐田市）のこと。開基は平道安、開山は川僧慧濟で、康正元年（一四五五）に開創。但し開山如仲天闇、二世真巖道空を勧請して川僧自身は三世と称した。真巖派の根本道場として栄えるが、慶長年間（二五九六～一六一五）に可睡斎との本末の争いが起こり、江戸幕府の裁定にて可睡斎の末寺となった。なお一雲斎の開創年代について外山映次氏は「遠州一雲斎三世川僧慧濟禅师年譜稿」（『埼玉大学紀要教育学部（人文・社会科学）』第二四巻）において享徳三年（一四五四）とする。

(2) 川僧慧濟……川僧慧濟（？～一四七五）は三河の人。幼くして華藏寺に投じて出家し、応永三十四年（一四二七）頃には遠江国大洞院に如仲天闇に参ずるなど、諸方を歴参。永享九年（一四三七）、越前龍澤寺にあった如仲天闇のもとで悟ると

ころあり、その後、近江洞寿院（滋賀県余呉町）の真巖道空（一三七四～一四四九）に嗣いだ。真巖より洞寿院を譲り受けた後、康正元年（一四五五）開創の万世山一雲斎に移り、如仲天闇を開山、真巖道空を二世に勧請してみずから三世となる。寛正元年（一四六〇）には越前龍澤寺十八世として入院、翌年には一雲斎に帰る。応仁三年三月六日（一四六九年）には總持寺に輪住、この時の入院の語は『（前總持）川僧濟禅师遺録』に見える。文明三年（一四七二）十月十五日から同五年六月十九日にかけて、「人天眼目」の提唱を行い、これが筆録され「人天眼目抄」として世に行われた。またこれに先立ち「碧巖録」の提唱も行っており、「碧巖録抄」として伝世している。文明七年（一四七五）七月九日、一雲斎において示寂。大永四年（一五二四）夏、後柏原天皇より「法覚仏慧禅师」と諡された。安永三年（一七七四）七月には、三百回遠忌に因み『（前總持）川僧濟禅师遺録』（三巻三冊）が開板されている。法嗣には大年祥椿の外、逆翁宗順、以翼長佑、石宙永珊があつて『聯燈録』に立伝される（後節参照）。川僧の行状は『聯燈録』の外、『洞上諸祖伝』巻下、『可睡斎年譜并由緒書』、『延宝伝燈録』三三、『本朝高僧伝』四二、『扶桑禅林諸祖伝記』に見え、さらに近年の成果としては外山映次氏「遠州一雲斎三世川僧慧濟禅师年譜稿」（前註1参照）に詳しい。

(3) 大年祥椿……大年祥椿の伝は本書にのみ見え、先行する他の燈史に立伝されない。生涯年については後註19参照。本書は火年を川僧慧濟の法嗣とするのみであるが、『曹洞宗全書』『大系譜』は、大年の師承に二系統を示す。一には梅山開本—太初繼覚—明林宗哲—錦江玄文—大年祥椿と云う次第をあげ、火年を「総持寺三一一世、福井龍澤寺二九世、静岡一雲

『日本洞上聯燈録』の研究(三) (近世洞門研究班)

一五二

- 齋四世、同可睡齋四世、山形乘慶寺四世、同大洞寺二世、同長嚴寺二世、同善宝寺開山、同宝恩寺開山、同天正寺開山」とする。二には『聯燈録』と同じく、梅山開本——如仲天間——真嚴道空——川僧慧濟——大年祥椿と次第する師承を挙げ、「総持寺三一―世、静岡可睡齋四世、静岡永源寺開山」とする。いずれも総持寺三一―世とするので、同一人を指していると判断したものであらう。両系統の寺院資料は、大年との関係を裏付ける。例えば、『越前龍澤寺史』所収「龍澤寺前住帳」には、「廿九世大年椿 錦江法嗣、入院文明十四年壬丑、此代当国乱、当寺武衛陣所」とある。ここでも、重嗣の事実に取り捨を加え一方の師承のみを採択するという、撰者嶺南秀恕の「聯燈録」編纂における姿勢が伺われる。この嶺南の態度については、本稿附論「嶺南秀恕の『日本洞上聯燈録』編纂姿勢の側面——崇芝性岱伝を素材として——」参照。
- (4) 本州の人……大年の住地一雲齋の所在地である遠江国を指す。
- (5) 甫て十三歳、出世の法を慕いて……本書の示す大年の寂年と世寿からすれば、十三歳は文安三年(一四四六)にあたる。後註19参照。
- (6) 山寺……大年得度の地、受業師ともに未詳。
- (7) 山に一大士有り……未詳。
- (8) 匏繫……人に食べられぬままぶらさがっているひさこの様子。ここでは大年が受業師の許に無為に留まっていたことを云う。その期間は十年ほどかと思われる。次註参照。
- (9) 川僧禪師、一雲に居す……一雲齋の開創は康正元年(一四五五)であるから、大年が川僧への参随を勧められたのは、大年二十二歳以降のこととなる。但し、一雲齋開創を享徳三年(一四五四)とする説もある。前註1外山論文参照。

(10) 如何なるか是れ学人の自己……「自己」を問う例は枚挙に暇がないほど中国の燈史、語録等に頻出する。日本中世の洞門において「自己」は、いわゆる曹洞三位の第一にあたる。飯塚大展氏は論文「長興寺の本参資料について」(『曹洞宗宗学研究所紀要』第十号所収)において、

無極派の夜参の図によれば、「自己・智不到・那時」、「自己・智不到・那邊」、「入処・徹処・点処」といった段階的な座標が設定され、公案の体系とその解釈の枠組みが形造られている。これらの術語は、夜参関連の切紙の外に、無極派の本参において頻出するものであり、同派の一つの特徴とも言えるものである。しかし、又一方で、他派の「語録抄」「代語抄」においても、解釈上のキー・タームとして用いられており、中世曹洞宗における公案理解を考慮する上で欠くことのできないものである。これらの述語を定義することは極めて困難であるが、それなしには抄物の内容理解は進展しないと思う。今日的に言えば、本参等の抄物は注釈書としての意義はあまり大きいものとは言えない。しかし、抄物が成立した時点においては、極論すれば、これ以上の解釈は存在しなかったと言えるのであり、当時のものとして理解されていたのかを改めて考察すべきものと考ええる。

と述べられている。周知のとおり「碧巖録抄」「入天眼目抄」のこのる川僧や、その資大年が生きたのは、まさに飯塚氏が指摘されるような、三位等により公案の解釈が行われていた時代であることに留意する必要がある。例えば大智禪師の提唱を踏まえ、了庵慧明以下の語を書き継いで十五世紀頃までに成立したかと思われる『天童小参抄』(『続曹洞宗全書』[注解三]一三四頁下段―一三五頁上段)には、「学人最初二知

有「自己」、後初テ此ノ事ニ向フ。初知有「自己」ルトハ、最初ノ悟入也」とある。大年当時において自己を問うことは、当時の参究の体系・階梯にも契うものであったかと思われる。

- (11) 本来廓然清淨……『伝光録』「第二十六祖（不如密多）章」（岩波文庫本「一一」～「一二」頁）に「すでに本心をあきらめ得るを、これを仏事と名く。本心知得の時、なほ生相なく滅相なし。いかにはんや、迷人なり悟人ならんや。かくのごとく見得する時、四大五蘊なほ存せず。三界六道あに立するごとあらんや。ゆゑに家としてすつべきところなく、身としておくべきところなき、ゆゑに出家といふ。住すべきところがゆゑに、家破れ人亡じぬ。故に生死涅槃ともに、はらはざるにおのづからつき、菩提煩惱すてざるに本来はなる。今日ただかくのごとくなるのみにあらず。劫より劫にいたるまでもとより成住壞空の四劫にもうつされず。生住異滅の四相にも縛せられず。廓然として空の内外なきごとく、清淨にして水の表裏なきに似たり。人人の本心悉皆かくのごとし」（傍線引用者）とあり、自己の本心を明め得たところ、本来、生死涅槃、煩惱菩提の相を離れ、虚空に内外なきがごとく廓然として、水に表裏なきがごとく清淨なるさまが説かれる。現在知られている最古の『伝光録』写本は、愛知県乾坤院所蔵本（永享二年（一四三〇）以降写）であり、その書写者は芝岡宗田（？）一五〇〇である。芝岡は逆翁宗順（一四三三～一四八八）の法嗣であり、逆翁は大年と同じく川僧の法嗣である。川僧の門流に『伝光録』が伝わっていることから、川僧自身にも『伝光録』の伝承があった可能性はある。
- (12) 生死、如何が……自己を明らかに得た本来のところは、もとより生死を脱しているが、大年はそこに留まらずさらに向上

を問う。転処の指示を請うものか。

- (13) 誰か汝を縛する……もとは三祖僧璨の四祖道信に対する答話の語。『景德伝燈録』三「僧璨章」（大正五一、一二二下）に「有沙弥道信、年始十四、来礼師曰、願和尚慈悲乞与解脱法門。師曰、誰縛汝。曰、無人縛。師曰、何更求解脱乎。信於言下大悟、服勞九載（沙弥道信あり、年始め十四、来りて師を礼して曰く、願わくは和尚慈悲、解脱法門を与えんことを乞う。師曰く、誰か汝を縛らん。曰く、人の縛るなし。師曰く、何ぞ更に解脱をめん。信、言下に大悟し、服勞すること九載）」とある。瑩山禪師の作としてながらく總持寺に秘藏され、享保十九年（一七三四）に刊行された『信心銘拈提』（大正八、四一九頁下段、四二〇頁上段）ではこれを踏まえ、本文「兩既不成、一何有爾」を釈して「二尚不立。況有二乎。破者二不存二不成一不顯。此處佛祖之不能道得。自己之不得探得。自體明了天真常現。不添一絲毫。不減一絲毫。誰縛汝、無人縛。與汝解脱了。誰是得解脱者。是凡耶是聖耶。非凡位非聖位。權名無位真人。當堂不正坐。何涉兩頭機。畢竟是爲誰。從來未知名。（一すら尚お立せず、況んや二有らんや。破すれば二存せず、二成らざれば一顯われず。此の処、仏祖も道得することを得ず、自己も探得することを得ず。自體明了、天真常に現ず。一絲毫を添えず、一絲毫を減ぜず。誰か汝を縛す、人の縛する無し。汝がために解脱し了れり。誰か是れ解脱を得る者ぞ。是れ凡か、是れ聖か。凡位にあらず、聖位にあらず、權に名づけて無位の真人と爲す。堂に当たつて正坐せず、何ぞ兩頭の機に涉らん。畢竟はれ誰とか爲す。從來未だ名を知らず）」

とある。「信心銘拈提」が中世洞門においてどれほど受容されてきたものか未詳であるが参考として挙げておく。

- (14) 維れ天、闕くこと有らば……『宏智録』二「頌古」第九則南泉斬猫の頌に「鑿山透海兮唯尊大禹、鍊石補天兮獨賢女媧(山を鑿て海に透るは唯だ大禹を尊び、石を鍊て天を補うは独り女媧を賢とす)」「(『禪籍善本古注集成』宏智録「上、八五頁」とある。これは『淮南子』卷六「覽冥訓」(明治書院「新釈漢文体系第五四卷淮南子(上)」三〇八頁)に「往古之時、四極廢、九州裂、天不兼覆、地不周載、火燄焔而不滅、水浩洋而不息、猛獸食頤民、鷙鳥攫老弱。於是女媧、鍊五色石、以補蒼天、斷鼇足、以立四極、殺黑龍、以濟冀州、積廬灰、以止淫水。蒼天補、四極正、淫水涸、冀州平、狡蟲死、頤民生(往古の時、四極廢れ、九州裂け、天は兼ね覆はず、地は周く載せず、火は燄焔として滅えず、水は浩洋として息まず、猛獸は頤民を食ひ、鷙鳥は老弱を攫む。是に於て、女媧は五色の石を鍊りて、以て蒼天を補ひ、鼇の足を断ちて、以て四極を立て、黒龍を殺して、以て冀州を済ひ、廬灰を積んで、以て淫水を止む。蒼天は補はれ、四極は正しく、淫水は涸き、冀州は平らぎ、狡蟲は死し、頤民は生く)」とあるを踏まえる。
- (15) 維れ月、虧くこと有らば……例えば『宏智録』六「真贊」(『禪籍善本古注集成』宏智録「上、四〇一頁)に「乘仙撻而棹星河、握玉斧而修月殿(仙撻に乗じて星河に棹し、玉斧を握りて月殿を修す)」とある。これは「宏智広録事考」によれば、『西陽雜俎』一「汲古書院『和刻本漢籍隨筆集』第六集所収、元禄十年刊本影印卷之一、十二丁左十三丁右)に「君知月乃七寶合成乎。月勢如丸、其影日燦。其四處也、常有八萬二千戸修之。予即一數。因開襖有斤鑿數事、玉屑飯兩裏(君知るや、月は乃ち七宝合せ成ることを。月勢、丸の如し、其の

影、日に燦す。其の四處や、常に八万二千戸有りてこれを修す。予は即ち一數。因て襖を開けば斤鑿數事、玉屑飯兩裏有り)」とあるに依るといふ。なおこの話柄は、古来より詩に用いられることが多い。

- (16) 舜若多神、咲いて点頭す……舜若多神は虚空を神格化したもの。『報恩録』下卷第二十三則(『曹洞宗全書』「宗源下」六二三頁上・下段)に、「宏智正覺禪師、僧問、淨裸裸赤洒洒時、作麼生行履。師云、空劫已前無所住、此人終不涉思惟。抄云、淨裸……人トハ、虚空人デ赤體ヨ。終ニ衣衫ノ付ヌ人ダゾ。サテ衣衫トハ、人ノ體ヲ受ルル云也、程ニ元來ヨリ人ノ體ヲ受ヌゾ。サテ答話ハ空劫ニモ不住。況今時日用ニモ不涉人也。故ニ此人ハ大虚ノ廓然ガ、其人ノ姿ダゾ。云、何如是此人云、舜若多人笑點頭。又指空中云、這箇聲」とある。

- (17) 一雲に住し……「一雲斎住山記牒」(「一雲斎所藏」)によれば、大年の一雲斎輪住は文明七年から九年の間とされる。さらに同十五年から十七年に再住したことも見える。

- (18) 總持に升る……『曹洞宗全書』「大系譜」は總持寺の『住山記』により、大年の總持寺輪住を文明一六年(一四八四)五月三日とする。

- (19) 永正癸酉……永正癸酉(十三年)は西暦一五一三年にあたる。また世寿を八十というから、生年は永享六年(一四三四)となる。

12. 以翼長佑禪師(『曹全』「史傳」三百七十頁下段)

江州洞壽以翼長佑禪師。尾州人。天曆皇帝之後也。少無意于世。依某師薙落。出遊參吾寶於大雄。如仲於龍澤。洞壽川僧禪師道眼圓明。投誠參究。一日聞僧上堂語。豁然領悟。即蒙

印可。嗣董洞壽。縑素靡然向化。文明乙未遷龍澤。丁酉遷大洞。長亨元年遷佛陀。延徳己酉入遠州八幡山。卓菴龍穴。江州有尼大姉安心。建喜見菴迎師。師移此以為終焉之所。文龜二年四月廿七日謝世。遺偈曰、八十七年。腐臭神奇。蹈翻華藏海。白日遶須彌。世壽八十七。坐五十八夏。出法嗣竺雲鳳。無外言。仁澤允三人。

〔訓読〕

江州洞壽、以翼長佑禪師、尾州の人、天曆皇帝の後なり。少にして世に意無し。某の師に依て難落す。出遊して吾宝に大雄に、如仲に龍澤に参ず。洞壽の川僧禪師、道眼円明なれば、誠を投じて参究す。一日、僧の上堂の語を聞て、豁然として領悟す。即ち印可を蒙る。嗣ぎて洞壽を董し、縑素靡然として化に向ふ。文明乙未龍澤に遷り、丁酉大洞に遷り、長亨元年仏陀に遷り、延徳己酉遠州八幡山に入り、龍穴に卓菴す。江州に尼大姉安心というもの有り。喜見菴を建て、師を迎ふ。師、此に移りて以て終焉の所と為す。文龜二年四月二十七日世を謝す。遺偈に曰く、「八十七年、腐臭神奇、華藏海を踏翻して、白日須彌を遶る。」世壽八十七、坐五十八夏。法嗣竺雲の鳳、無外の言、仁澤の允ら三人を出す。

〔註記〕

『日本洞上聯燈録』の研究 (三) (近世洞門研究班)

(1) 江州洞壽……滋賀県伊香郡余呉町にある塩谷山洞寿院のこと。開山は如仲天闇(一三六五―一四四〇)で、本寺は福井県あわら市の平田山龍澤寺である。また、洞寿院は、龍澤寺の輪番院でもあった。

洞寿院は、応永十三年(一四〇六)に如仲が北越から塩津村祝山に来て結庵し、蛇谷山洞春庵を開創したことにはじまる。ここに住する事三年、菅並の山に入るや、白山妙理権現が塩泉の地を施したことに因み、塩谷山洞寿院と号したという。『聯燈録』四「如仲天闇章」、「近江伊香郡志」下(一九七二刊)、『曹洞宗文化財調査目録解題集』5「近畿管区編」(一九九九年刊)、以下「曹洞宗文化財調査目録解題集」を「解題集」と略す、参照。

(2) 以翼長佑……以翼長佑(一四一六―一五〇二)のこと。『曹全』「大系譜」によれば、福井龍澤寺二十五世、滋賀県洞寿院四世、静岡県永江院(龍穴院)開山に数えられる(各寺院については、後注参照)。また、「以翼」は「伊翼」とも表記される。以翼の伝記類は『聯燈録』の他、「龍澤寺前住帳」(『越前龍澤寺史』一九九二刊)に断片的に見られる。(註(12)参照)。

(3) 尾州……尾張(現愛知県西部)のこと。

(4) 天曆皇帝之後なり……天曆年間(九四七―九五六)が、村上天皇の在位期間(九四六―九六七)中であることから、村上天皇の後裔であるの意と思われる。

(5) 難落す……難髪、剃髪のこと。出家時の受業師は未詳。

(6) 吾宝に大雄に……神奈川県南足柄市の大雄山最乗寺八世吾宝宗璨(一二三八―一四五七)に参じた。

(7) 如仲に龍澤に……龍澤寺六世如仲天闇に参じた。

(8) 道眼円明なれば……道眼は大道を洞察出来る眼力、円明は

『日本洞上聯燈録』の研究(三)(近世洞門研究班)

一五六

完璧で明らかなこと。ここでは、以翼が川僧に参じた由縁をいう。なお、訓読文は訓点をあらため、文脈上「なれば」と補った。

(9) 緇素靡然……緇素は僧俗、道俗のこと。靡然は草木が風になびくように、なびき従う様のこと。ここでは、洞寿院において以翼が教化する際、僧侶も俗人もともに以翼になびき従った様子をいう。

(10) 文明乙未龍澤に遷し……文明七年(一四七五)に龍澤寺(「日本洞上聯燈録」の研究(二)「雲岡榮玖章」参照)に住した。龍澤寺前住帳(「越前龍澤寺史」)によれば、「二五世以翼佑、川僧法嗣、入寺文明六年甲午、此代中庄半済分帰寺、心月寺智樵和尚取次」とあり、龍澤寺への入寺は文明六年(一四七四)のこととある。

(11) 丁酉大洞に遷し……文明九年(一四七七)に静岡県周智郡森町の大洞院(本稿「崇芝性岱章」参照)に住すること。

(12) 長享元年仏陀に遷し……長享元年(一四八七)に仏陀寺(石川県、現廃寺)に住したこと。なお、「解題集」5に、洞寿院所蔵資料「加賀仏陀寺未来条々置文写」が著録されている。解説によれば、応永三年(一三九六)八月に仏陀寺開本が手書した置文を長享三年(一四八九)五月一日に以翼が謄写したものとあることから、この時期に仏陀寺に住していたものと思われる。

(13) 延徳己酉遠州八幡山に入り……延徳元年(一四八九)、八幡山に入り、龍穴に庵を結んだこと。明治十八年(一八八五)に掛川市内の曹洞宗寺院から同宗務局に提出された「寺籍財産明細帳」の永江院の項(「掛川市史」資料編古代・中世一九九六刊)には、永江院の開創について「延徳己酉年、八幡ヶ谷(當時下垂木字岩谷)ニ壺宇ヲ開設シ龍穴庵ト号ス。所

有地七石五斗目、隣村大池村ニテ壺石式斗買入、明應六丁巳年倉真城主松浦兵庫守帰依ニ付、貢租諸役免除ノ朱印被成下龍穴院殿太甫成功大居士ト申、當院開基ト称ス。」(一)内割註とあることから、倉真城主松浦兵庫守が開基であることが分かる。また、龍穴院は後に、永江院(静岡県掛川市)と名称が変わるが、それについては、同資料に「永正十五戌寅年四代鳳積和尚永江院ト相改メ候。」とあり、一五一八年に永江院と改めたことが分かる。なお、龍穴を結んだ地とされている八幡山及び八幡ヶ谷は、現在の地名からは確認することは出来ない。また、「龍穴」とは、堪輿家(墓地の選定にあたり吉凶を判断することを専門とするもの)に関する語句で、山の気脈の結ばれたところを指し、墓穴に適しているという。

ちなみに、底本(寛保二年板本)の「延徳己酉」を、『曹全』本は「延徳己未」と作る。

(14) 江州に尼大姉安心というもの有り。喜見菴を建て、師を迎ふ。……江州(滋賀県)の尼大姉安心は未詳。「解題集」5に、洞寿院所蔵資料「洞寿院年貢帳」が著録されており、それによれば、文明十九年(一四八七)八月一日の書上の中に養源庵安心の名が見える。また、喜見菴(滋賀県伊香郡余呉町)について、『近江伊香郡志』下(一九七二刊)には「文安二年(一四四五)本村源次郎なるもの洞寿院二世真巖道空禪師に帰依し剃髪して其弟子となり名を喜公という。後一寺を興す、号して喜見庵と称す」とある。また、『解題集』5に、洞寿院所蔵史料「孤峰龍札書状」が著録されている。それによれば、年未詳ではあるが、永平寺龍札より洞寿院宛の書状で、真巖の開山地喜見菴に関する件とある。

(15) 文龜二年……一五〇二年

八十七年、腐臭神奇……八十七年の世寿を踏まえた遺偈。

『了堂惟一語録』に「便乃悟去。構角取乳。且道。倒跨三脚驢。踏翻華藏海。畢竟又如何話會。以拂子畫一畫。人間秋半。天上月」とあり、「踏翻華藏海」の句が見られる。了堂惟一は、元代の人で、宝永三年（一七〇六）には『了堂和尚語録』四巻が刊行されている。

また、『点鉄集』には、「白蓮峯頂上、紅日遶須彌（正二祖忌上堂）紅霞穿碧海、白日遶須彌」とあり、「白日遶須彌」の句が見られる。『点鉄集』は逆翁宗順（一四三三—一四八八）の著書である。

なお、底本（寛保二年板本）の「腐臭」を『曹全』は「腐具」に作る。底本に依り訂す。

(17) 竺雲の鳳……竺雲一鳳（寂年未詳）、無外珪言（一五〇七寂、仁沢一允（寂年未詳）のこと。以翼の法嗣について『曹全』「大系譜」には、無外珪言、竺雲一鳳が記載されているが、嶺南編『日本洞上宗派図』は、仁沢一允を含む三名を記載している。

13. 逆翁宗順禪師（曹全）史伝上、三七〇頁下—三七二頁上

尾州乾坤院逆翁宗順禪師。自稱藏鷲叟。本州源氏子。生而敏捷。於墳典史籍。無不精究。尤邃於易學。既圓顙頂。乃腰包出關。

時川僧禪師住一雲。師往造。僧示以雲門關字話。師勇猛提持踰年。一日詣丈室。僧舉前話。問之。師擬進語。僧震威一喝。師當下豁然。令掌記室。無何命首衆。

『日本洞上聯燈録』の研究（三）（近世洞門研究班）

〔訓説〕

尾州乾坤院⁽¹⁾、逆翁宗順禪師⁽²⁾。自ら藏鷲叟⁽³⁾と称す。本州源氏の子。生まれながらにして敏捷、墳典史籍に於て精究せずといふこと無し。尤も易学に邃きなり。既に顙頂を円かにす。乃ち腰包、関を出づ。

時に川僧⁽⁴⁾禪師、一雲⁽⁵⁾に住す。師、往きて造る。僧、示すに雲門関の字の話を以てす。師、勇猛提持して年を踰へ。一日、丈室に詣す。僧、前話を挙げて之を問う。師、進語せんと擬す。僧、威を震いて一喝す。師、當下豁然たり。記室を掌らしむ。何く無くして命じて衆に首たらしむ。

〔註記〕

(1) 尾州乾坤院……愛知県東浦町緒川にある宇宙山乾坤院のこと。文明七年（一四七五）、開基水野貞守、開山川僧慧済（水野は母方の姓）が緒川城を築城した際、乾（北西）の方角に氏神八幡社を、坤（南西）の方角に氏寺乾坤院を創建したとされる。戦国期には、水野家が緒川の支配力を失うとともに一時的に荒廃したもの、緒川城主第七代の水野分長の手により復興した。その後、江戸期は唯一の檀家水野氏の菩提寺として、尾張・三河・遠江に六十一ヶ寺の末寺を擁した。現在の本尊は大通智勝仏であるが、これは寛永十二年（一六三五）頃、刈谷城主松平忠房の母が京都の仏師に作製させ寄進したもの。元來の本尊は釈迦牟尼仏で、大通智勝仏の胎内

『日本洞上聯燈録』の研究(三)(近世洞門研究班)

に収められている。なお「尾州」は尾張のことで、現在の愛知県西部、張州とも。

(2) 逆翁宗順……一四三三—一四八八。乾坤院第二世。乾坤院開創の際に水野貞守より開山として招聘されるが、師の川僧を勧請開山として自らは二世となった。伝記資料としては、ここに扱う『聯燈録』巻七の他、普濟寺(愛知県東海市)に所蔵されている『乾坤開山二世三世禪師伝』の「乾坤二世逆翁禪師傳」が佐藤悦成「逆翁宗順と尾張の曹洞宗」により

『聯燈録』巻七

尾州乾坤院逆翁宗順禪師。自称藏鷲叟。本州源氏子。

生而敏捷。於墳典史籍。無不精究。尤邃於易学。既円顚頂。乃腰包出関。

時川僧禪師住一雲。師往造。僧示以雲門関字話。師勇猛提持踰年。一日詣文室。僧拳前話。問之。師擬進語。僧震威一喝。師當下豁然。令掌記室。無何命首衆。

文明乙未。尾州緒川城主源貞守水野氏。創宇宙山乾坤院。延師住之。師推川僧。為開山之祖。

僧贈以法衣自賛頂相。

山中乏水。師卓杖嶮崖曰。此処定有水。俄頃而甘泉湧沸。亢旱不涸。名曰卓杖泉。

紹介されている(『宗学研究』二七、昭和六十年三月)。佐藤氏によれば、この書の奥書に「享保三龍舎戊戌年」とあることから享保三年(一七一八)の成立とということになる。『聯燈録』が享保十二年(一七二七)の成立であり、嶺南が情報収集をしていた時間を考慮するならば、ほぼ同時代に成立した書ということが言えよう。内容的にもほぼ対比が可能なので、原文の対照表を付しておく。

『乾坤二世逆翁禪師傳』

禪師諱崇順^{マツノ}。字逆翁。自称藏鷲叟。史失其世族生縁。或伝云。水野氏也。永亨五年癸丑十一月晦日誕矣。

総角而有俊邁之標。伝探群藉。兼精易学。雍染之後。鑽研教乘。智刃新出。以雅有禦侮之才。人喚曰順書記。

既而嘆曰。假如窮諸玄弁。豈足義学之域耳。豈足以得休歇也哉。因欲学離文字之法。謁川僧和尚。僧授以宗門関捩。師孜孜參究。一旦豁然撥転。遂得入室。密受衣法。

尾州緒川城主。水野藏人貞守金通居士。欽師道誓。請之為創一院。実文明七年乙未之夏也。師不以功自居。殊延川僧老師。為開山祖。乃以宇宙扁山。乾坤為院名。源公崇信益篤。割膏腹之地。賑其香積。

且僧祖以自讃頂相付師。師頂戴包納。永為寺鎮。今梅花像是也。師自為第二世。法幢丕耀。緇素嚮風。

第山中水乏。人憚其汲於遠矣。師適盤桓庭際。卓杖山崖。日此処定有水。俄頃而甘泉淙淙。隨杖騰沸。就之鑿石為池。亢旱不涸。名曰卓杖泉。

又側鑿一井。貯其余滴。厨下之所用。無不賴之矣。師或時遊津嶋。

十一年己亥補一雲。

甲辰遷大洞。

乙巳再有一雲之命。使宗田代応請。

丙午謝大洞歸乾坤。

長亨改元之秋退席。命宗田司院事。

時遠之長松法弟石宙遷化虛席。師行補之。

長亨二年戊申八月十五日謝世。寿五十六。闍維建塔本山。

得法者有宗田一人。

師纂修点鉄集。建仁天隱作之序。有試拈出一条生鉄。抛向老人面前。則点以成百鍊精金。非畜成精金。和箇還丹以尽底掀翻去也。於是初知。西天此土一冊点鉄集也之語。

由是師之道義。可慨見焉。

なお、『曹洞宗全書』「大系譜」には、逆翁が岩手の大興寺五世でもあることが記載されているが、そのことについては、伝記資料からは窺えない。逆翁には、著書として『点鉄集』がある他、『蔵鷲集』なる語録の存在がやはり佐藤氏により指摘されている。しかし『蔵鷲集』は、まだ公開されるに至

詣天王廟。其夜夢。天王寢冠偉服。就師親詢法要。師為之敷宜禪旨。天王歛喜作礼。嚙以大黑天像云。個天当護師大法。黎明及過長橋。果得大黑天像。一如所夢。奉之而帰焉。此像今猶存矣。師所到處。異迹頗多。略不載。

文明十一年。応幣乎一雲。

同十六年。遷領大洞席。各三歲。

同十七年。再得一雲之請。教宗田往而掌監院。

明年八月。解大洞寺印帰山。

長亨改元之秋。待田師謝一雲監職而回。即以山門属之。

時因法弟石宙珊公示寂之後。遠之長松虛主席。徑行補其院事。

同二年戊申八月十五日安詳而化。世齡五十有六。闍維收設利羅。

于本山。

塔蓋師生平。甚慎許可。故入其轂者。僅田師一員而已。自余剃度

弟子。若干箇唯。中易省淳慶泉三人。綽有余裕者也。師命之嗣田

師。其旨深矣。

嘗所自著。点鉄集三十卷。盛行于世。建仁天隱作之序。序中有。

試拈出一条生鉄。抛向老人面前。則点以成百鍊精金。非畜成精金。

和箇還丹。以尽底掀翻去也。於是初知。西天此土一冊点鉄集也。

之語。

っていない。また、乾坤院で行われた授戒会を通しての逆翁の活動については、広瀬良弘「中世禅僧と授戒会―愛知県知多郡乾坤院蔵「血脈衆」「小師帳」の分析を中心として―」(『禅宗地方展開史の研究』所収、吉川弘文館、昭和六十三年十二月)、佐藤悦成「瑩山下における曹洞宗の展開―尾張乾坤院を中心として―」(『印度学仏教学研究』四十四卷二号、平成

『日本洞上聯燈録』の研究(三)(近世洞門研究班)

八年三月)がある。

- (3) 藏鷲叟……「藏鷲」は「宝鏡三昧」に「銀碗に雪を盛り、明月に鷲を藏す」(『禪林僧宝伝』一所収、続藏一三 七・四四三下)とあるを踏まえる。元々白い白銀の碗に白い雪を盛る、やはり白々とした明月に白い鷲が紛れるとは、いずれも白い点で同じとも言えるが、やはり別々のものとも言え、二つのものが一体であると同時に別体でもある。仏から見たもののことの在り方を喩えた言葉。現在の日用経典『宝鏡三昧』では「碗」を「盃」と表記しており、「盃」は小鉢を指す意。大きな意味の違いはないであろう。「叟」は翁という程の意。
- (4) 本州源氏の子……「本州」は尾州を指す。ここでは「源氏」の末裔とのみあるが、「乾坤二世逆翁順禪師伝」では「史失其世族生縁。或伝云水野氏也。(史、其の世族の生縁を失す。或いは伝えて云う、水野氏なりと)」とあり、また「尾州緒川城主。水野藏人貞守源公」とあるから、水野氏の縁者である可能性が言われ、このことは『聯燈録』の割註に「水野氏」と見えることから窺える。佐藤氏は、当時近隣(浜松)の普濟寺に華藏義曇(一三七五―一四五五)なる高僧が存在したにも拘わらず、静岡の大洞院の川僧の会下に参じた不自然さを指摘し、逆翁が水野氏の縁者であったが故に、水野氏と敵対関係にあった吉良氏が帰依する華藏の会下には行けなかったのではないかと推測している。また、同書には「永亨五年癸丑十一月晦日誕矣。(永亨五年癸丑十一月晦日に誕る)」とあるから、逆翁は一四三三年十一月三十日に誕生したことが知れる。
- (5) 墳典……三墳五典の略。三墳五典については諸説あるが、総じて聖人・賢人が著したとされる中国の古書を指す。
- (6) 顚頂を円かにす……「顚」も「頂」も頭を指す。頭を丸め

る、即ち出家を意味するであろう。

- (7) 腰包、関を出づ……「腰包」は腰に付けた巾着のことであるが、『勅修百丈清規』巻第三「入門」に「古人腰包頂笠到山門(古人は腰包・頂笠にして山門に到れり)」(大正藏四八・一一二五中)とあり、行脚をしている修行僧の様相を示す。従つて、逆翁が尾州を越えて他国へ行脚したことを指すと思われる。
- (8) 川僧……逆翁の師、川僧慧濟(?―一四七五)のこと。川僧については本稿「大年祥椿章」註2参照。
- (9) 一雲……静岡県豊岡村にある万世山一雲斎のこと。本稿「大年祥椿章」註1参照。
- (10) 雲門関の字の話……雲門文偃(八六四―九四九)が修行者を導くために「喝」「呌」「露」「俱」「拶」「擗」等、僅か一字で禅の本質を言い表し、それが修行者に対する一つの関門になつてゐるため、これを雲門の一字関という。ただし特に「関」の一字と解するならば、『碧巖録』巻第一第八則に「拳。翠巖夏未示衆云。一夏以来。為兄弟說話。看翠巖眉毛在麼。保福云。作賊人心虛。長慶云。生也。雲門云。関。(挙す。翠巖、夏末に衆に示して云く、一夏以来、兄弟の爲めに說話す。看よ、翠巖が眉毛在りや。保福云く、賊を作す人は心虚なり。長慶云く、生ぜり。雲門云く、関。)」(大正藏四八・一四八中、本則のみ)とあるを指すであろう。
- (11) 勇猛提持して……「提持」は禅の指導者が弟子に問題を突きつけることであるが、こゝは弟子の立場である逆翁が主語であるから、単純にひつさげるの意で、川僧より提示された雲門一字関の難問に果敢に挑み続けた事実を指すか。
- (12) 進語……即座に発言すること。
- (13) 記室を掌らしむ……書記の役職に任命されたこと。「記室」

は書疏の製作を掌る役職、書記のこと。また、書記の住する室のこと。

- (14) 衆に首たらしむ……首座に任命されたこと。書き下した読みになっているが「首衆」は、衆僧（修行僧）の先頭に立つ役職、首座のこと。禪頭、上座、座元、立僧、第一座などとも。

文明乙未。尾州緒川城主源貞守^{水野氏}。創宇宙山乾坤院。延師住之。師推川僧。爲開山之祖。僧贈以法衣自贊頂相。山中乏水。師卓杖嶮崖曰。此處定有水。俄頃而甘泉湧沸。亢旱不涸。名曰卓杖泉。

〔訓読〕

文明乙未、尾州緒川¹⁶の城主、源貞守^{水野氏}、宇宙山乾坤院を創る。師を延^ひきて之に住せしむ。師、川僧を推して開山の祖と爲す¹⁸。僧、贈るに法衣・自贊の頂相を以てす。山中水に乏し、師、杖を嶮崖に卓^{たて}て曰く、此の処定んで水有り。俄頃^{にわか}にして甘泉湧沸す。亢旱^{こうかん}にも涸れず。名づけて卓杖泉と曰う。

〔註記〕

- (15) 文明乙未……文明七年（一四七五）。「乾坤二世逆翁順禪師伝」では「文明七年乙未之夏」としている。川僧の示寂が同年七月九日であるから、開創後間もなくに没したことになる。

- (16) 緒川……愛知県東浦町緒川。小河（小川）氏が、鎌倉期初

頭にこの地に定着したとされ、「緒川」は、あるいは小河氏に因んだ地名と思われる。

- (17) 源貞守……水野貞守（一四三七～一四八七）のこと。水野氏は旧姓小河（小川）氏と称し、美濃源氏の流れを汲んだとされる。「乾坤二世逆翁順禪師伝」には「尾州緒川城主。水野藏人貞守源公^{法名玄室 金通居士}」とある。

- (18) 師、川僧を推して開山の祖と爲す……『聯燈録』巻第六の「川僧章」では、乾坤院をめぐる逆翁との関係を「尾州乾坤院者。嗣子逆翁挿草之地。而請師爲第一祖。（尾州乾坤院は、嗣子逆翁の草を挿せるの地にして、師を請して第一祖と爲す）」『書洞宗全書』「史伝上、三四九頁下」と記している。

- (19) 自贊の頂相……この頂相について「乾坤二世逆翁順禪師伝」では「今梅花像是也（今の梅花像、是れなり）」とあるから、現存している可能性もあろう。

- (20) 甘泉……淡い酒のような味のする泉。

- (21) 亢旱……厳しい日照りのこと。

- (22) 卓杖泉……現存も乾坤院内の放生池脇にその跡を残している。

十一年己亥補一雲。甲辰遷大洞。乙巳再有一雲之命。使宗田代應請。丙午謝大洞歸乾坤。長亨改元之秋退席。命宗田司院事。時遠之長松法弟石宙遷化虛席。師行補之。長亨二年戊申八月十五日謝世。壽五十六。闍維建塔本山。得法者有宗田一人。

〔訓読〕

十一年己亥⁽²³⁾、一雲に補す。甲辰⁽²⁴⁾、大洞に遷る。乙巳⁽²⁶⁾、再び一雲の命有りて宗田⁽²⁷⁾をして代わりて請に応ぜしむ。丙午⁽²⁸⁾、大洞を謝して乾坤に帰す。長享改元⁽²⁹⁾の秋、席を退き、宗田に命じて院事を司らしむ。時に遠の長松法弟、石宙遷化して席を虚くす。師、行きて之を補す。長享二年戊申八月十五日、世を謝す。寿五十六。闍維して本山に塔を建つ。得法の者、宗田一人有り。

〔註記〕

(23) 十一年己亥……文明十一年(一四七九)。

(24) 甲辰……文明十六年(一四八四)。

(25) 大洞……静岡県森町にある橋合山大洞院のこと。本稿「崇芝性岱章」註7参照。

(26) 乙巳……文明十七年(一四八五)。

(27) 宗田……逆翁の法嗣、芝岡宗田(？一五〇〇)のこと。美濃(岐阜)の人。俗姓は芝田氏。逆翁に二十年侍し、乾坤院第三世となる。延徳二年(一四九〇)龍澤寺に住するが三年後に再び乾坤院に戻る。伝記は「聯燈録」巻第八にみえる。

(28) 丙午……文明十八年(一四八六)。

(29) 長享改元……文明十九年(一四八七)は、七月二十日をもって長享に改元している。ここでは逆翁が遷化した石宙(本稿「石宙永珊章」参照)に代わって長松寺に行ったのをこの年のこととするが、長松院所蔵の『深澤山住山記』では、石宙遷化を文明十八(一四八六)のこととし、逆翁についても、

前總持乾坤開山逆翁宗順大和尚禪師。文明十八年聯燈録記長一
当年前住 享元年誤也雲齋輪番中入院。禪師八川僧公第三子。尾州緒川乾坤院

開關鼻祖也(前總持乾坤の開山当逆翁宗順大和尚禪師は、文明十八年聯燈録に長享元年一雲齋輪番中に入院す。禪師は川僧公の第三子にして尾州緒川の乾坤院の開關鼻祖なり)。と、「聯燈録」が誤解している旨を述べている。

(30) 院事……寺院の経営に関する事をいう。「院」は寺院の総称、「事」は人事を含む庶務一般。

(31) 遠の長松……遠江(静岡県)掛川市にある深澤山長松院のこと。文明三年(一四七二)、松葉城主、河合(河井)宗忠(？一四九六)の開基。開山は石宙永珊(次註参照)、勸請

開山は川僧慧濟。

(32) 石宙……石宙永珊のこと。川僧慧濟の法嗣、すなわち逆翁の兄弟弟子。初め一雲齋に住し、大洞院に移り、後に長松院を開創した。伝記は「聯燈録」巻第七にみえ、逆翁に後事を託す遺書を残したという。本稿「石宙永珊章」参照。

(33) 長享二年戊申……一四八八年。

(34) 闍維……荼毘、すなわち火葬のこと。

(35) 本山……乾坤院のことを指すか。

師纂修點鐵集。建仁天隱作之序。有試拈出一條生鐵。拋向老人面前。則點以成百鍊精金。非畜成精金。和箇還丹以盡底掀翻去也。於是初知。西天此土一冊點鐵集也之語。由是師之道義。可慨見焉。

〔訓読〕

師、「点鉄集」⁽³⁶⁾を纂修す。建仁の天隱⁽³⁷⁾、之れが序を作す。「試

みに一条の生鉄³⁸を拈出して老人の面前に抛向すれば、則ち点³⁹じて以て百鍊の精金と成す。甞だ精金と成るのみに非ず、箇⁴⁰の還丹に和して以て底を尽くして掀翻⁴¹し去るなり。是に於て初めて知る、西天此土、一冊の点鉄集なり」の語、有り。是れに由りて師の道義、概見しつ可し。

〔註記〕

- (36) 点鉄集……二十五卷。『景德伝燈録』をはじめとする九十八種の典籍から公案問答に相応しい四万三千句以上もの語句を摘出し、韻によつて分類整理した書。駒澤大学図書館に所蔵される。文明十七年(一四八五)付けで天隠龍澤(次註参照)の序が附される。標題の「点鉄」は、『景德伝燈録』卷第十八、靈照章に「還丹一粒点鉄成金。至理一言点凡成聖。(還丹の一粒、鉄に点じて金と成す。至理の一言、凡に点じて聖と成す)。(大正五一・三五二中)とあるを踏まえた言葉。ただし『従容録』卷第三、第四十三則では「還丹一粒点鉄成金。至理一言転凡成聖(還丹の一粒、鉄に点じて金と成す。至理の一言、凡を転じて聖と成す)」(大正四八・二五四下)とある。
- (37) 建仁の天隠……建仁寺にあった臨済宗の僧、天隠龍澤(一四二三―一五〇〇)のことで、默雲の別号がある。播磨(兵庫)の人。天柱龍濟(生没年不詳)の法嗣。十歳の時建仁寺で出家して二十年、真如寺(京都府)に出世し、文明十五年(一四八三)に建仁寺に入り、長享元年(一四八七)に南禅寺に入る。『天隠和尚語録』一卷、『默雲集』二巻がある。
- (38) 生鉄……混じり気のない鉄、また、まだ鑄ていない鉄のこと。この生鉄を鑄ると非常に堅固になるといふ。

(39) 老人……ここでは逆翁のことか。

(40) 抛向……対象に向かつて投げ出す。何かをめぐけて投げる。

(41) 点じて……点灯、即ち火を付ける意に解すこともできるが、註記(36)との関連から考えれば、何らかの妙薬を点滴する意に解することもできる。

(42) 百鍊の精金……十二分に精鍊された黄金のこと。『碧巖録』卷第四、第三十九則垂示に「欲假百鍊精金。須是作家炉鞴。(百鍊の精金を假えんと欲せば、須是らく作家の炉鞴なるべし)。(大正藏四八・一七七中)とある。

(43) 還丹……神仙秘密の妙薬で、これを鉄の上に置けばたちまちに鉄が金になるという。道家の行った一種の鍊金術。

(44) 掀翻……ひっくり返す。

(45) 概……原文には「慨」とあるが、文意より改めた。

14. 石宙永珊禪師(『曹全』「史伝上」三七一頁上段)

遠州長松院石宙永珊禪師。登戒徧參諸方。緣契川僧。初領一雲。次徙大洞。暮年遊奥野邑。喜其幽邃。縛茅以塾焉。未幾成寶坊。山名深澤。院稱長松。禪衲蠅聚。盈數百指。潤飲蔬食。遞相警策。師題肖像曰。默坐牀上總忘言。耳中見色。眼處聽音。咦。枯木巖高徑路遠。水晶簾垂玉樓深。有時一笑閭浮下。裂破須彌第一岑。一日示微疾。遺書於乾坤逆翁。囑後事。沐浴更衣。吉祥而逝。長享改元丁未正月二十六日也。

〔訓読〕

遠州長松院⁽¹⁾石宙永珊禪師⁽²⁾、登戒⁽³⁾して諸方に徧⁽⁴⁾参し、縁、川僧に契⁽⁵⁾う。初め一雲を領し、次⁽⁶⁾に大洞に徙⁽⁷⁾る。暮年、奥野の邑に遊ぶ。其の幽邃⁽⁸⁾を喜びて、茅を縛⁽⁹⁾して以て墊⁽¹⁰⁾す。未だ幾くならず宝坊と成る。山を深澤と名づけ、院を長松と称⁽¹¹⁾す。禪納顚聚⁽¹²⁾、数百指に盈⁽¹³⁾つ。潤飲⁽¹⁴⁾蔬食、遞⁽¹⁵⁾に相ひ警策⁽¹⁶⁾す。師、肖像に題⁽¹⁷⁾して曰く、「牀上に默坐⁽¹⁸⁾して総て言を忘⁽¹⁹⁾ず。耳中に色を見て、眼処⁽²⁰⁾に音を聴く。嘆。枯木巖⁽²¹⁾高くして径路遠し。水晶の簾垂⁽²²⁾れて玉楼深⁽²³⁾し。有る時一笑⁽²⁴⁾す、閻浮の下。裂破⁽²⁵⁾す、須弥の第一岑⁽²⁶⁾。一日、微疾⁽²⁷⁾を示す。書を乾坤の逆翁⁽²⁸⁾に遺して後事を嘱⁽²⁹⁾し、沐浴⁽³⁰⁾して衣を更⁽³¹⁾へ、吉祥にして逝⁽³²⁾す。長享改元⁽³³⁾丁未正月二十六日なり。

〔註記〕

『聯燈録』

遠州長松院石宙永珊禪師。

『重統日域洞上諸祖伝』

長松院石宙永珊禪師傳
師諱永珊。石宙其號也。未詳氏族本貫。

『深澤山住山記』(一) 内割註

深澤山長松院歷代住山記

遠孫二十四葉傳心佛宗訂編
前總持當院開祖石宙永珊大和尚禪師
禪師高祖承陽大師第十一世。一雲川僧公第四嗣也。

初於信州某寺薙髮。央徧參諸方叢席。後謁見川僧公于一雲齋。公一日。示洞山無情說法話。

登戒徧參諸方。縁契川僧。

薙染進具後。徧遊諸方。縁契川僧濟公。

(1) 遠州長松院……静岡県掛川市大野。山号は深澤山。古くは天台宗寺院と伝える。本章で扱う石宙永珊が、文明三年(一四七二)に開創し、師の川僧慧済を勧請開山とした。開基は遠州松葉城(静岡県掛川市)主・河合宗忠(後註15参照)。石宙を嗣いだ教之一訓のちは寛永五年(一六二八)まで輪住制を敷く(参考文献「曹洞宗宗宝調査目録解題集1 東海管区編」曹洞宗宗務庁、一九九一年)。

(2) 石宙永珊禪師……生年未詳。出家地・受業師未詳。世寿未詳。示寂年については後註16を参照。川僧慧済の法を嗣ぎ、法嗣には教之一訓が在る(曹全「大系譜」)。「聯燈録」のほか、「重統日域洞上諸祖伝」三(曹全「史伝上」、以下「重統」と略す)に伝記を所載。

また長松院には、『深澤山住山記』(明治三十九年、二十四世伝心仏宗編、以下『住山記』と略す)があり、開山石宙永珊・二世教之一訓の伝記と、永正九年(一五一一)から寛永五年(一六二八)まで続いた輪住の記録と、独住一世声巖宗譽以下歷代住持の伝を載せる。

初領一雲。次徙大洞。暮年遊與野邑。

喜其幽邃。縛茅以蟄焉。未幾成寶坊。山名深澤。院稱長松。

禪衲蠟聚。盈數百指。澗飲蔬食。遞相警策。

師題肖像曰。默坐牀上總忘言。耳中見色。眼處聽音。咦。枯木巖高徑路遠。水晶簾垂玉樓深。有時一笑闔浮下。裂破須彌第一岑。

一日示微疾。遺書於乾坤逆翁。囑後事。沐浴衣更。吉祥而逝。長亨改元丁未正月二十六日也。

初領一雲。次徙大洞。暮年解印。遊與野邑。而至一所。溪澗湛藍。松杉聳翠。遠隔塵寰。最可禪晏。

師喜其幽邃。而居止焉。未幾爲寶坊。山名深澤。院稱長松。

禪衲蠟聚。盈數百指。澗飲蔬食。遞相警策。寔山林盛事也。

師自題肖像曰。默坐牀上總忘言。耳中見色。眼處聽音。咦。枯木巖高徑路遠。水晶簾垂玉樓深。有時一笑闔浮下。裂破須彌第一岑。

延德二年庚戌孟春初。遺書於乾坤逆翁。囑後事。至念六日沐浴衣更。吉祥而逝。

逆翁領院一周而退。師嗣子教之訓公。繼席不失家法。道化益昌。大樹義澄公。捨庄田若干頃。永資食輪。於今爲一方望刹。

禪師頓有省悟。直呈所解。公領許之。付以衣法。俾侍巾瓶。出世總持。應化各所。

先領一雲。次徙大洞。暮歲來此。

深喜幽邃。縛茅居焉。遂成寶坊。名深澤山長松院。

蓋因境地。得此名乎。寔文明參年也。禪師家風峻嶮。行履綿密。負笈禪衲。倏盈數百。一徼芙蓉。嚴守叢規。遞相警策。道價丕騰。嗣子教之和尚。授機入室。亦在此時。

同歷十八年正月。示微恙。遺書尾州緒川乾坤院逆翁師兄。囑後事（嗣子教之和尚所悟未契乎）。沐浴更衣。端坐而化。其月二十六日也。開院至茲十又六年。法臘世壽傳記不詳。

院藏禪師自畫自題肖像。其題曰。默坐牀上總忘古今。耳中見色。眼處聽音。咦。枯木巖高徑路遠。水晶簾垂玉樓深。有時一笑闔浮下。裂破須彌第一岑。

いま参考として、『重統』と『住山記』所載の石宙伝を『聯燈録』の記述と対比して以下に掲げておく。

『重統』は、示寂年を異にし、石宙示寂後の長松院についての記載（後註15参照）があるが、大きな異同は見られない。

『住山記』は、近代の資料ながらも、『聯燈録』に見えない記述があり注目される。例えば、石宙の出生地は不明ながらも信州の寺院で薙髪したということ、長松院の開創が文明三年(一四七二)ということが揚げられる。その他の異記については以下の各註で触れていく。

(3) 登戒……登壇授戒の意であろうが、ここでは単に出家することを指すか。文脈上「登戒して」と送り仮名を補った。

(4) 徧参……遍く諸方の知識に歴参すること。雲水行脚して尋師訪道すること。

(5) 縁、川僧慧済に契う……川僧慧済と機縁が契って印可證明を受けたこと。川僧慧済については本稿「大年祥椿章」を参照。『住山記』には、石宙は川僧と一雲斎で謁したこと、「洞山無情說法話」によって大悟し川僧より衣法を受け、その巾瓶に侍したこと(「巾瓶」は布巾と水器。僧が左右に常置して心身を清める道具。転じて左右に親しく随時することを指す)、總持寺に出世したことなどが記されている。

(6) 初め一雲を領し……「一雲」は万世山一雲斎(静岡県磐田市、本稿「大年祥椿章」参照)のこと。一雲斎は三世川僧慧済の法嗣大年祥椿以降、輪住制が敷かれており、一雲斎所蔵の『一雲斎住山記牒』によると、石宙永珊は文明十三(一八八二)年(一四八一)一四八三に一雲斎に輪住している。

(7) 次に大洞に徙る……「大洞」は大洞院(静岡県森町、本稿「崇芝性俗章」参照)のこと。

大洞院は開山如仲天閑以降、輪住制が敷かれており、輪住の記録として大洞院所蔵『大洞禪院住山記』や長松院所蔵『橘谷山大洞院住山記』等の資料があるが、これらには長享元年(一四八七)以降の輪住しか記載されていない。

それ以前の輪住については、広瀬良弘氏「地方禪林の住持

制度に関する一考察―遠江大洞院の輪住制―」(『曹洞宗研究員研究紀要』第十一号、一九七九年)による指摘があり、不琢玄珪―石叟円桂―物外性応―大輝靈曜(応永三十一年頃より五年)―黙堂彦智―川僧慧済(宝徳四年秋より三年)―茂林芝繁―行之正順(文明七年)―以翼長佑(文明九年)―逆翁宗順(文明十六(一八八四)年)―石宙永珊―行之正順(長享元年)と推測されている。

(8) 奥野の邑……長松院が所在する地の旧地名。明応五年(一四九六)九月二十六日に、今川氏親が長松院に「山口郷内奥野」を寄進したのが初見とする(長松院所蔵「今川氏親寄進状」)。以後奥野は、今川氏歴代当主によって領有が認められたことが「長松院文書」より知られる。近世には奥野村と称し、明治初年に大向村・源兵衛村と合併し大野村と称す(『日本歴史地名体系』第22巻 静岡県の地名「平凡社、二〇〇〇年、『角川日本地名大辞典』22 静岡県」角川書店、一九八二年等参照)。

なお、今川氏親が長松院に宛てた禁制と寄進状を参考に掲げる。

今川氏親禁制

(花押)

於当寺長松院、甲乙人等令濫妨狼藉者、速可処嚴科者也、仍而如件、

明応五年七月十八日

今川氏親寄進状

遠江国金屋郷内深谷・山口郷内奥野・下西島郷内仏道寺并五反田事

右、為料所奉寄進之上者、如前々可有執務之状如件、

明応五丙辰年九月廿六日

(今川氏親)
五郎(花押)

長松院

『静岡県史』資料編7 中世三、静岡県、一九九四年 より

前者の禁制は、戦国大名今川氏の遠江侵攻と長松院近辺で合戦があったことを示す資料として、また遠江に発給した初見文書として資料的意義が高い。後者の寄進状は、「奥野」地名の初見文書である。先の禁制に関わる合戦の際に、長松院が今川氏方についたことがうかがわれ、その恩賞としての意味を持つものである。『住山記』には、この合戦で長松院開基河合宗忠(俗名成信)が、九月十日に戦死したのを氏親が悼んで寄進したものである(後註15参照)。

(9) 其の幽邃を喜びて、茅を縛して以て蟄す……「幽邃」は奥深く物静かなさま。幽遠。「茅を縛して」は草庵等を営むことを指す。「蟄」は虫や動物などが土中に閉じこもること。ここでは石宙が奥野の幽遠な景観を喜んで草庵を営んだことを指す。

(10) 未だ幾ならず……院を長松と称す……『聯燈録』の記載に従えば、石宙は一雲斎と大洞院の輪住を経て、晩年に長松院を開創したことになる。長松院の開創については、『住山記』には文明三年(一四七二)と記されている。しかし前註6・7を鑑みると、一雲斎と大洞院の輪住は文明末年のことになり、年代が前後する。

ただし広瀬氏前掲論文(註7)や同氏の御指摘により、先に寺基を整えてから輪住する例の方が妥当であることなどの御教示を得た。

ここでは石宙の一雲斎・大洞院輪住にもこのケースが適用された可能性があったこと、石宙の伝記を粉飾する上で、一

雲斎輪住↓大洞院輪住↓長松院開創という経歴を重視した可能性があったことを示唆しておきたい。

(11) 禪納蠟聚、数百指に盈つ……「蠟聚(蟻集)」は大勢の人間が蟻のように集まるさま。数百という数は大勢の比喩であろう。

(12) 潤飲蔬食……「潤」はたにがわ。「蔬食」は質素な食べ物。長松院における厳格な修行を喻えたもの。『住山記』には石宙の禅風として「禪師家風峻嶮。行履綿密。」と記されている。

(13) 師、肖像に題して曰く……この賛は面山瑞方編「洞上夜明簾」(『曹全』「歌頌」)にも収録。なお、長松院に現存する開山石宙永珊自賛と伝えられている頂相の賛は「以有不知有以無不知無 是何事何事 昨夜鳥声去 石宙自賛」である。

(14) 牀上に黙坐して総て言を忘す……須弥の第一岑……「洞上夜明簾」および『住山記』では「黙坐牀上総忘古今」(牀上に黙坐して総て古今を忘す)とする。

(15) 書を乾坤の逆翁に遺して後事を嘱し……長松院二世は石宙の法嗣教之一訓であるが、ここでは法兄に当たる逆翁宗順に後事を託している。このことについて『住山記』では「嗣子教之和尚所悟未契乎(嗣子教之和尚所悟未だ契はざるか)」と推測している。逆翁宗順については本稿「逆翁宗順章」を参照。

また『重統』には、石宙寂後のこととして、「逆翁領院一周而退。師嗣子教之訓公。繼席不失家法。道化益昌。大樹義澄公。捨庄田若干頃。永資食輪。於今爲一方望利。」との記載がある。これによると、石宙示寂の後、逆翁が中継ぎ的な存在として住持した後に、教之に嗣がれたと解釈できる。「大樹」は征夷大將軍の異称であり、室町幕府第十一代將軍足利

義澄(一四八〇—一五一・在職一四九四—一五〇八)を指す。ただし足利義澄の寺領寄進については他の記録や徴証は見えない。長松院には今川氏親の寄進状をはじめとする今川氏歴代の古文書が六点現存するが、『聯燈録』『重統』等の燈史類には今川氏との縁は触れられていない。

ところで、『住山記』所載の教之一訓伝を紹介したい。教之伝は『聯燈録』『重統』等の燈史類には見えないので、『住山記』所載のものが唯一の教之伝となる。(一)内割註

前總持當院二祖教之一訓大和尚禪師

長享二年從岡村聖壽寺晉院。禪師姓今川氏。駿河之人(傳言氏親叔父)。夙厭塵閑。志有濟世。首謁一雲川僧禪師。稟記朔。徧歴訪諸名德。歸就石祖。深受錫筭。屢陳所見。遂領入室。後參逆翁和尚。領旨。爾來應接多年。偶有豪族門奈(美作守)玄仲居士。慕嚮禪師。創聖壽軒。請師居焉。專參師席。逆翁和尚遷化于院。曰命薰席。禪師機鋒英邁。氣識超倫。當時緇素。靡然嚮風。院門益隆。明應二年。文龜三年。永正四年。同八年。四住一雲。其永正四年。兼住大洞。到處道價彌揚。明應五年九月十日。今川氏功臣。俗弟子河井宗忠(松葉城主俗名成信)為敵攻城。敗走來此自殺。請師秉炬。同月二十六日。今川氏親寄附莊田四箇所之証(蓋此地先河井成信所喜捨之地乎)。特賜制札。以護當院。爾來本院。山川改觀。永正二年八月五日。氏親附領地之改証。晚年深谷大姓。岩堀左近。勸建精舍。號金龍山養勝寺。延師為開山第一祖。同歷九年正月十一日。同寺示寂(川僧禪師之伝衣箇此寺)。臘壽不詳。有嗣法四人。覺雄鑑。一鱗角。順叟孝。法山益。各皆揚化創刹。舍黎分三所。從是當院為輪住。

(16)

この教之伝で特筆できることは、教之が今川氏親の叔父とされていることである。また開基河井宗忠についても詳しく、実名が成信ということ、今川家臣であり明応五年(一四九六)九月十日に戦死したことなどが記されている。とくに前註8で掲載した資料についても触れられていて、奥野村等の寄進は河井宗忠の死を契機としたものであったことが記されている。この教之伝は、前註8資料をはじめとする今川氏との縁は、教之が今川氏の出自であったことが大きく影響していたことがうかがえる重要な逸話として注目できよう。

長享改元丁未正月二十六日……長享元年は一四八七年であるが、長享改元は七月二十日なので、一月の時点では文明十九年である。『重統』では延徳二年(一四九〇)一月二十一日示寂とする。また『住山記』では、文明十八年(一四八六)一月二十六日とし、長松院ではこの六日を開山忌としている。

附論、嶺南秀恕の『日本洞上聯燈録』編纂姿勢の側面

——崇芝性岱伝を素材として——

塚 田 博

はじめに

嶺南秀恕は、『日本洞上聯燈録』（以下『聯燈録』と略す）編纂過程について、「凡所歴之叢林。適獲片言隻字之涉祖蹟者。酷於獲照乘夜光。多歷年所。微挾其可伝者。髮櫛而緝貫焉。（凡そ歴する所の叢林、適ま片言隻字の祖蹟に渉る者を獲れば、照乘夜光を獲る於りも酷し。多く年所を歴て微く其の伝う可き者を挾びて髮櫛して緝貫す。）」（自序）と述べているように、あらゆる言葉や資料に注目してその整理を行った。同時に「又移書於大方尊宿、展転搜討。（又た書を大方の尊宿に移して展転搜討す。）」（凡例）とあるように、方々に書状を遣わして、各地に所蔵されている個別の行状記や伝記類を閲覧し、祖師行状の考証に当たった。また『延宝伝燈録』や『日域洞上諸祖伝』など、従来の燈史類に評価・批判を加えている。こうした真摯にて実証的な姿勢は、先の自序・凡例の中で、嶺南自身が再三唱えている

ることからも知られ、そのことは『聯燈録』各巻末の「考証」や『日本洞上宗派図』の「校訛」からも証明できるであろう。したがって、『聯燈録』は、嶺南による資料批判・解釈・思想を経た文章ということは言うまでもない。行状記・伝記等がほとんど残っていない祖師も多いが、いくつか残されている祖師の場合はなおさらであろう。

我々は、本稿第一回目で、『聯燈録』に関する評価や課題をいくつか示した。最大の課題は、幾つかの先行業績で述べられているように、開板禁止に至る理由と経緯であるが、本稿に関するところであろうと、

嶺南は、曾ての師承関係が伽藍相統を前提としていたという歴史的事実と、宗統復古を経過した後の一師印証・師資面授を前提とする歴史像とのズレを確かに認識していると思われる。さらにその上で、後者の立場から『聯燈録』を構想したのではなからうか。

嶺南の立場が、かようなものであるならば、『聯燈録』で取り上げた資料をどのように検証しているのか、今後の研究において注目すべき点の一つとして検討してゆきたい。そして、嶺南の見ていた視点を探りたいのである。^⑥と課題を設定し、また、

特に本末意識は江戸幕府の政策と相俟つて、法系譜の確定を促したものと推測されるが、そこに各寺院・各人の思惑が介入したであろうことは想像に難くない。嶺南の描く法系譜とて必ずしも歴史的事実と合致しないのかも知れないが、少なくとも他の法系譜と比較し得る点において研究の余地を充分に残しているし、それは嶺南自身の宗派意識を知ることにもなるであろう。^⑦

との意識のもとに『聯燈録』の訓註を進めてきた。

今回の訓註を行う中で、『聯燈録』以外の伝記を検討したところ、崇芝性岱と月泉性印について、嶺南による資料の取舍選択の形跡が明らかであった。特に崇芝性岱の場合は、示寂直後から伝記があるのにもかかわらず、意図的に記述を避けたと思われる形跡があった。

本稿では、数ある『聯燈録』の課題の中でも、特に崇芝性岱^⑧の諸本を素材に、そこに垣間見える嶺南の資料選択・立場・意識等について考察し、『聯燈録』編纂の姿勢やその背景について提言したい。

一、崇芝性岱伝について

【表1】崇芝性岱伝資料別対比表は、崇芝の伝記類諸本を成立順に列挙し、それぞれの事績ごとに年代順に配列したものである。したがって年代の欄を縦に見てゆくと、ほぼ同じ時期の事績が記されていることになる。最下段は、この中で刊行がもっとも新しい『聯燈録』である。

【表1】を一見してわかることは、『聯燈録』は記述が簡潔であることに加えて、直近に刊行された『延宝伝燈録』や『日域洞上諸祖伝』に記された事績で触れていない箇所があるということである。

まずは、各資料の性格について見てゆきたい。ただし『聯燈録』は本稿で訓註対象としているものであり、本稿第一回目で触れているので、ここでは詳述しない。

①『淨牧院聯燈録』（淨牧院所蔵、『曹全』『史伝上』）

崇芝伝の中で最古の資料。淨牧院（東京都東久留米市）の勸請開山茂林芝繁・二世崇芝性岱・三世大空玄虎の伝記を書き継いだもの。それぞれの伝記の撰は、

「茂林和尚行録」…文明十四年（一四八二）、二世崇芝性岱撰
「宗芝性岱和尚之行状記」…文亀元年（一五〇二）、三世大空玄虎撰

「大空和尚行狀録」：永正十年（一五二三）、四世明巖志宣撰となっている。

以上のように『浄牧院聯燈録』は、師の伝記を弟子が撰じたものであり、事績や年紀に関しては、同時代資料としての性格が非常に高い。各事績には多くが年紀・年齢も併記され、歴住地の住持年代も詳しい。

崇芝伝に関しては、三世大撰「宗芝岱大和尚之行狀記」以外にも、『茂林和尚行録』の中に多くの記述が見える。したがって「茂林和尚行録」は崇芝自伝ともいべき特筆すべき資料である。

いずれにしても『浄牧院聯燈録』は崇芝伝として、第一の根本資料として最重要視するに価する。なお、崇芝発給文書写が四通収録されている。

また、『曹全』解題（鈴木泰山執筆）では、

即ち年次資料の伝記としては洞門最古の確信のもてる基本資料で、『双林寺聯燈録』と同じく、室町時代中葉の古文書を収めており、中世に於ける洞門教団拡充期の宗風や門侶の統制、衆議権の尊重や民俗との習合など、いわゆる道元禅を核心としながらの教団展開の方途を示唆しているものと断ぜられる。換言すれば、室町期の洞門僧侶が両祖の家風を折中して、如何に機敏に社会革命の暴風雨に対処していったかを物語る貴重な史料である。

附論、嶺南秀恕の『日本洞上聯燈録』編纂姿勢の一側面

短篇であるからといって、軽々に看過する等のことがある。決して絶対に不可である。

と評せられ、崇芝伝のみならず、洞門における重要な資料であると断じられている。

なお、「茂林和尚行録」は「茂林繁和尚九州肥后高瀬人也。」と始まり、茂林と崇芝の伝記が交錯して記述されていて、必ずしも年代順に記載されていないので、【表1】では適宜年代順に組み替えて掲載した。また「宗芝岱大和尚之行狀記」は、「当院開基宗芝和尚太禅師。嗣茂林志繁。諱性岱。三州賢産也。」と始まり、それ以降の文章を順に記載した。ただし延徳三年と明応五年の記述の間に収録されている「龍門山石雲院置文之事」（崇芝性岱章訓註（24）に掲載）と「御開山禁制云」は省略した。

②『浄牧院記』（浄牧院所蔵、『続曹全』「寺誌」）

前書と同様、浄牧院に伝わる伝記。前半は崇芝伝を中心に、浄牧院のほか石雲院を開創した経緯を記す。後半は両院のその後の相伝・輪番を年譜の形式で記録したものが中心となる。明暦元々四年（一六五五）の撰述。記述は簡便で、『浄牧院聯燈録』ほどではないが、年紀・年齢の記載がある。末尾の延徳三年（一四九二）、崇芝撰「龍門山石雲院置文」は『浄牧院聯燈録』にも収録。

本資料は「文以。関東武蔵国多東群前澤神護山淨牧院者。武州八王子城主。安祝公所開基之勝地也。」と始まり、崇芝が開山となったことを述べる。【表1】にはその記述以降から崇芝の示寂までを記載した。資料の性格上、淨牧院の記述が中心になっているのは当然のことだが、崇芝の淨牧院に関する記述は本資料にしか見えず（本節末尾年譜の※印）、崇芝伝に新たな一面を提供するものである。

③『延宝伝燈録』（曹全）「史伝上」

卍山師蛮撰。延宝六年（一六七八）成立、宝永三年（一七〇六）刊行。四十巻。日本禅僧一〇二三名、総員およそ一一〇〇名の僧侶の伝記を収録。うち曹洞禅僧は一一五名。崇芝伝は巻九に収録。

崇芝伝は「備中洞松崇芝性岱禅师」で始まる。【表1】にはそれ以降を記載。

④『日域洞上諸祖伝』（曹全）「史伝上」

湛元自澄撰。元禄六年（一六九三）成立、翌年刊行。二巻。曹洞宗を中心に七十名の伝記を収録。崇芝伝は巻下に収録。のちに徳翁良高によって正徳四年（一七一四）に『統日域洞上諸祖伝』（四巻、曹洞宗九十一名を収録）が、享保二年（一七一七）に蔵山良機によって『重統日域洞上諸祖伝』（四巻、曹洞宗九

十四名を収録）が刊行される。

崇芝伝は「洞松寺崇芝岱禅师伝。師諱性岱。字崇芝。」で始まる。【表1】にはそれ以降を記載。

以上の崇芝諸伝を踏まえた上で、『聯燈録』崇芝伝の構成を確認したい。

① 幼少の頃の逸話。大洞院如仲天闇のもとで得度。

② 喜山性讀とともに洞松寺へ。喜山示寂後に諸国歴遊。永明寺月因性初に参じたのち、洞松寺に帰る。

③ 文安六年（一四四九）、茂林芝繁のもとで大悟。その席を嗣いで住持する。

④ 康正元年（一四五五）、石雲院を開き、以後三十余年留まる。

⑤ 明応五年（一四九六）十月二十七日示寂。

【表1】を比較すると、『延宝伝燈録』（以後『延宝録』と略す）や『日域洞上諸祖伝』（以後『諸祖伝』と略す）では、康正元年（一四五五）に崇芝が石雲院を開いたことは、文明十三年（一四八二）のところに付記のごとく記されるのみで詳述せず、一方『聯燈録』では文明十三年（一四八二）の事績について全く触れていないことがわかる。文明十三年の事績とは、「豆州太守元資」の帰依による伽藍造営である。「豆州太守元資」

は、莊伊豆守元資^⑩のことで、『浄牧院聯燈録』『茂林和尚行録』の記述から、備中洞松寺（岡山県矢掛町）での事績と判断される^⑪。

一方で、同じ『浄牧院聯燈録』でも、「宗芝岱大和尚之行状記」では、備中洞松寺での事蹟については触れず、康正元年（一四五五）の石雲院開創について記している。

したがって『延宝録』『諸祖伝』では「茂林和尚行録」に基づいた洞松寺の事績を、『聯燈録』では「宗芝岱大和尚之行状記」に基づいた石雲院の事績を重視しているといえる。このことは『延宝録』『諸祖伝』が宗芝伝を「備中洞松崇芝性岱禪師」「洞松寺崇芝岱禪師伝」と立伝しているのに対し、『聯燈録』では「遠州龍門院石雲院崇芝性岱禪師」としていることから明白である。ことに『聯燈録』では、「影、山を出でざることは三十余年」とし、康正元年（一四五五）年の石雲院開創後は晩年まで当地に留まったことを強調している^⑫。

さらに『浄牧院聯燈録』と『浄牧院記』を合わせると、宗芝伝を全て補完することができる。ことに『浄牧院聯燈録』は前述したように、まさに宗芝伝の根本資料といえ、近世成立の『延宝録』『諸祖伝』『聯燈録』の宗芝伝全ての底本といふべき資料である。

では、なぜ近世の宗芝伝において、洞松寺系（『延宝録』『諸祖伝』）と石雲院系（『聯燈録』）があるのだろうか。前者は「茂

林和尚行録」に目を通し、後者は「宗芝岱大和尚之行状記」に拠ったから、というのはいささか短絡的であろう。なぜなら嶺南の『聯燈録』編纂姿勢から鑑みれば、『浄牧院聯燈録』全てに目を通していたことは十分考えられ、卍山師蛮や湛元自澄についても（本稿ではこの二人については触れないが）、これに近い作業を行っていたことは想像に難くない。すなわち、意図的に取捨選択された記述ということになる。

したがって、本稿では、『聯燈録』宗芝伝の空白を埋める備中洞松寺での事績、ならびに洞松寺歴住の推移と、そこにおける宗芝の位置を見ることが、嶺南が『聯燈録』に採録した宗芝伝の視点を考察したい。

ここで宗芝性岱の事績を伝記諸本から整理しておく。嘉吉二年（一四四二）の喜山性讚示寂までは、いずれも大差はないが、以後の事績を諸本から統合してみると次のようになる。

文安元年（一四四四） 浄牧院を開創。※

文安六年（一四四九） 上州館林茂林寺の茂林芝繁を慕い、旅寓先の武州岡智足院に赴く。※

茂林の付法を受け住持する。^⑬

康正元年（一四五五） 遠州に赴き、法幢寺に旅寓する。※

石雲院を開創。

長祿二年（一四五八） 浄牧院に再住。※

寛正元年（二四六〇） 淨牧院を大空玄虎に譲り石雲院に帰る。※

文明十二年（二四八〇） 茂林芝繁より洞松寺住持の要請を受ける。※

文明十三年（二四八二） 茂林の再度の要請で洞松寺に住持。洞松寺開基家・莊元資の助援により伽藍を興隆する。

延徳三年（二四九二） 石雲院に輪番を定め隱退。

明応五年（二四九六） 十月二十七日示寂。

※印の記事は『淨牧院記』のみに見えるもの。

二、洞松寺の世代の推移

（一）『洞松寺住山記』の性格

本節を述べるに当たって、まず『洞松寺住山記』（洞松寺所藏）を紹介しておく。『聯燈録』で崇芝の洞松寺での事績が削除されている背景を探る資料として、以後本稿で頻用する。なお、本資料中の「舟木山洞松禪寺輪次住山記」（後述）に崇芝性岱伝が立伝されているが、大部分が『諸祖伝』からの引用なので【表1】には掲載しなかった。

『洞松寺住山記』（表題は表紙題箋による、以下『住山記』と略す）は、のちに洞松寺十二世となった梅岳慧香（二六八五―一七六四）が、享保十六年（一七三二）、備中瑞雲寺に住していた

頃に撰じたものである。梅岳の序文によると、洞松寺は輪住すること二百年來、八十余世を数え、「前住記」と称するものが一、二本あったが、「多有脱誤。或有錯簡。」であるので、「現主人之命」（十一世碧峰桃巖か）を受け、古記を探り、口碑を究明し、また『諸祖伝』『重統諸祖伝』等を閲覧し、諸嶽山（能登總持寺）・平田山（越前龍澤寺）の住山記などを参考に「してまとめた」という。そして「後來以是勿為真本。若又有博識広覧之人。闡千古奥藏。扶今日法門。則法喜禪悦以何謝之乎。仍書之序。」（後來是を以て真本と為することなかれ。若し又博識広覧の人有りて、千古の奥藏を聞き、今日の法門を扶けば、則ち法喜禪悦、何を以てこれを謝らんや。仍てこれを書して序とす。）と、本書には未だ誤りがあること、それを後人の手によつて糺されることを期待して序を終えている。

本資料は、乾坤二冊から成り、以下の構成となっている。

〔乾卷〕

○舟木山洞松禪寺輪次住山記序（曹全）「拾遺」に収録

梅岳の序文。享保十六年。

○法系図

太源宗真から始まる洞松寺歴代の系譜。

○舟木山洞松禪寺輪次住山記

洞松寺勸請開山如仲天間から八十世に至る輪住と、その後の独住を列記し、嗣法関係、判明する者は出身地・示寂年

月日・住持時期等を載せる。

○舟木山門葉世代記

洞松寺末二十九ヶ寺とその歴住を記録。

〔坤卷〕

○舟木山洞松禪寺住山歴祖伝〔曹全〕「拾遺」に収録

まず道元―孤雲懷奘―徹通義介―瑩山紹瑾―寂山韶頌―太源宗真―梅山開本の伝記を載せ、次いで洞松寺勸請開山怒仲―二世喜山―三世茂林―四世靈嶽―五世崇芝、以下十一世に至るまでの伝記を載せる。崇芝以後は、秀峰繁俊―禪庵繁興―東庵周益―梁山全桂―能山字賢―賢室俊哲―天室護俊の伝記を載せるが、全て「前住」とされていて、十七世紀半ばに至ってから六世天叟寿覚と記載され、七世則導玄休―八世鸞州本鸞―九世乾巖雷峰―十世觀山月心―十一世碧峰桃巖に至っている。なお、道元伝と懷辨伝の間に、享保二年（一七一七）、面山瑞方撰「永平高祖年譜略」（道元の生涯を七言の長詩で詠った詩偈）を載せるが、『曹全』では省略されている。

○舟木山住山記跋〔曹全〕「拾遺」に収録

梅岳の跋文。享保十六年。

○舟木山洞松禪寺記〔曹全〕「寺誌」に収録

寛保二年（一七四二）、洞松寺十二世となった梅岳が撰じたもの。洞松寺の由緒を簡潔に述べている。『住山記』の最

終的な跋文のとしての性格を持つものと思われる。

（2）草創期の世代

洞松寺は近世初期まで八十世を数える。『住山記』乾卷所収の法系図と「舟木山洞松禪寺輪次住山記」（以下「輪次住山記」と略す）をもとに作成したのが【表2】洞松寺歴住法系図である。

如仲天間を開山（勸請）とし、二世喜山性讃、三世茂林芝繁と直系で継承され、四世は茂林の法弟の靈嶽洞源が立った。茂林から崇芝の間の洞松寺世代の経緯について「輪次住山記」から見てみると、

三世茂林	嘉吉二	宝徳元年	（一四四二）	四九	初住八年	15
四世靈嶽	宝徳元	康正元年	（一四四九）	五五	初住七年	
再住茂林	康正元	寛正三年	（一四五五）	六二	再住八年	
再住靈嶽	寛正三	同六年	（一四六二）	六五	再住四年	16
三住茂林	寛正六	文明六年	（一四六五）	七四	三住十年	
三住靈嶽	文明六	同十六年	（一四七四）	八四	三住十一年	
五世崇芝	住職凡	そ十二年	（一四八四）	九五		

以上のように、初期の洞松寺は、茂林・靈嶽が交互に入り、崇芝に受け継がれていたことが知られる。

崇芝晋住の背景について、『淨牧院聯燈録』の「茂林和尚行録」には次のことが記されている。

文明十二年（一四八〇）、茂林は老齡を理由に崇芝の洞松寺晋住を要請するが一旦は断わられ、翌年、茂林は崇芝へ「後來学徒志。乾慧而我慢邪慢増上慢而。豈有得印可証明者乎。加之我在仏陀寺時。馳書頃。以曾今日。伝廬嶽与崇芝外。別更可無印可人。豈二言乎。今当寺已及断絶。願余命之中來住持矣。（後來学徒の志、乾慧にして、我慢・邪慢・増上慢にして、豈に印可証明を得る者有らんや。これに加へ、我、仏陀寺に在りし時、書を馳する頃、曾て今日を以てす。廬嶽、崇芝とに伝ふる外、別に更に印可の人と無くなるべしと。豈に二言ならんや。今当寺已に断絶に及ぶ。願はくば余命の中に来りて住持せしめよ。）」と記した書状を送つて再度要請し、崇芝はこれを受けたとある。

すなわち、茂林・靈嶽の交代住は、適任者不足によるものであった。^⑪「輪次住山記」ではこの時期は靈嶽三住の頃に当たたるが、事実上茂林が老体を押して寺務を執り、崇芝に引き継いだと考えられる。^⑫

一般に知られる茂林と靈嶽の伝記^⑬では、茂林は嘉吉二年（一四四二）、喜山示寂を受けて洞松寺に入り、宝徳二年（一四五〇）に遠江大洞院に移り、長祿三年（一四五九）に能登總持寺に出世し、文明三年（一四七二）に加賀仏陀寺（現魔寺）に住し、晩年に洞松寺に帰り、文明十九年（一四八七）示寂。一

方、靈嶽は洞松寺に住したのち、康正二年（一四五六）に越前龍澤寺に転住し、さらに總持寺に出世し、延徳三年（一四九二）に示寂した。このように従来の燈史からでは、彼らの洞松寺再住については判然としないので、「輪次住山記」の資料的価値がうかがえよう。

（3）輪住期の世代

その後の洞松寺の世代は輪住制が敷かれ、明暦三年（一六五七）に天叟寿覺が入寺するまで続く。崇芝以降しばらくの輪住世代の嗣法関係と示寂年を「輪次住山記」及び【表2】から見ると、次のようになっている。

前住六世月泉性印	（靈嶽法嗣）	一四七〇年寂
前住七世秀峰繁俊	（茂林法嗣）	一五〇八年寂
前住八世霄岩澄通	（靈嶽法嗣）	一四八二年寂
前住九世大空玄虎	（崇芝法嗣）	一五〇五年寂
前住十世嚴芝性繁	（靈嶽法嗣）	寂年未詳
※「曹全」「大系譜」では崇芝法嗣とする。		
前住十一世周牧三鼎	（月泉法嗣）	寂年未詳
前住十二世昭雪繁融	（茂林法嗣）	寂年未詳
前住十三世勝嶽長通	（靈嶽法嗣）	一四八二年寂

※八世霄岩と十三世勝嶽は同一人物か。

前住十四世華翁禪春（霄岩法嗣） 一五四一年寂
前住十五世禪庵繁興（秀峰法嗣） 一五二六年寂

このように靈嶽系と茂林系が交互に晋住していることがわかる。

しかし、六世月泉・八世霄岩については、彼らの示寂年と、「輪次住山記」に記されている三世茂林・四世靈嶽及び五世崇芝の住持年代と照らし合わせると、明らかに年代的に矛盾が生じることがわかる。

六世月泉について「輪次住山記」には、

当山前住〔第六世〕月泉性印和尚〔備中人事・靈嶽法嗣〕

住山年曆未詳。蓋文正・応仁之間。一回住歟。雖然住山

古記順次如此。後來校正之。文明二年庚寅十二月廿八日。

先本師而遷化。嗣子二人。開尾之福嚴・濃之開元院。

（住山年曆未だ詳かならず。蓋し文正・応仁之間、一回住するか。

然ると雖も住山の古記順次此の如し。後來これを校正す。文明二

年庚寅十二月廿八日、先本師而遷化。嗣子二人。尾の福嚴・濃の

開元院を開く。）（一）内割注

とあるように、洞松寺側（撰者梅岳慧香）でも、住持時期について疑問視している。また、以後の輪住についても「輪次住山記」には、住持名・師名・歴住地を掲げるのみで、ほとんどの者は出身地・示寂年月日・住持時期等その他の事績は

記されていないので、輪住世代については大部分が判然としない状態であったことがうかがえる。

次に『住山記』に見える輪住関係の記述を以下に示す。

A 「舟木山洞松禪寺住山歴祖伝」崇芝伝

本資料の崇芝伝は『諸祖伝』の引用だが、末尾に右の記述が付記されている。

舟木室中口授曰。輪番初住権与于此師。一坐十二年。然年月等分明不記矣。後遠州石雲一派容師肖像。投入牌料。而安本山第五世焉。（舟木室中口授に曰く。輪番の初住、此の師に権与す。一坐十二年。然し年月等分明に記さず。のち遠州石雲一派、師の肖像を容れて、牌料を投入して、本山第五世に安す。）

B 「舟木山住山記跋」

従秀峯已下十二三輩者。本于口碑。録于紀年。而待後昆之校正焉。以是勿真本。謗吾罪吾者。是只此記也而已。（秀峯より已下十二三輩の者は、口碑にもとづき、紀年を録して、待後昆の校正を待つ。是れを以て真本とすることなし。吾を謗し吾を罪する者は、是れ只此の記ならんのみ。）

C 「舟木山洞松禪寺記」

以之請本師怒仲禪師。而為開山第一祖。自居二世。行道多

歳。四方龔侶雲聚。禪海龍象水湊。淬精拔萃在二枝神足。扶揚法門。曰茂林也。曰靈嶽也。讀師化緣既尽。而嘉吉二年壬戌初秋四日示滅。享齡六十有六載。在住三十一年也。令命二子補遺席焉。二子交易而奉師命。初住八年讓法弟。或七年讓法兄。再住八年又四年。三住十年同十一年逮代相統。而不墜本師之威風矣。二哲戡化後崇芝岱公。十二年住之勲。其後又二師之遺弟瀾滿本州他邦。而不知幾許多。或東海北陸之諸州称末山者夥焉。奉二師之顧命而各務輪篆之役。凡二百年。住世殆八十年代。（これを以て本師怒仲禪師を請じて、開山第一祖と為す。自ら二世に居る。行道多歳、四方の龔侶雲のごとく聚り、禪海龍象水のごとく湊る。精を淬き萃を抜く。二枝の神足在り。法門を扶揚す。曰く茂林なり。曰く靈嶽なり。讀師化緣既に尽きて、嘉吉二年壬戌初秋四日示滅。享齡六十有六載。在住三十一年なり。二子に命じて遺席を補はしむ。二子交易して師命を奉る。初住八年法弟に譲り、或いは七年法兄に譲す。再住八年・又四年。三住十年・同十一年。逮代相統して本師の威風を墜す。二哲化を戡めてのち崇芝岱公、十二年住の勲あり。其の後又二師の遺弟、本州他邦に瀾滿して、幾許多知らず。或いは東海北陸の諸州、末山と称する者夥し。二師の顧命を奉りて、各輪篆の役を務むること、凡そ二百年。住世殆んど八十年代。）

Aには、輪住は崇芝により定められたこと、一坐十二年で

あったがその年月日等は不明であること、また崇芝はのちに石雲院側によつて洞松寺五世に数えられたことが記されている。

Bには、七世秀峰以降に関しては、口碑によつてのみの採録であり、年代さえも不明であることが記されている。そのために後人の校正に期待し、本書を真本とすることがないようにと、撰者梅岳は述べている。同様の文は『住山記』序でも述べられているように、輪住世代の信憑性については、洞松寺では十分に自覚されていることであつた。

Cには、輪住に至る経緯が記されている。すなわち、二世喜山のもとに、茂林・靈嶽の二神足があり、以後はこの二人の交代により遺命を嗣いだ。（二人の初住・再住・三住年数を記して）その後は、崇芝が入り十二年間住持した。崇芝ののちは、本州（備中国）・諸国に多く広がつていた茂林・靈嶽の遺弟たちが、また東海北陸の多くの末山と称する寺院が輪番を務め、およそ二百年間、八十世に及んだ、とある。

したがって、先の「輪次住山記」を含め『住山記』では、五世崇芝までの事績は信ずるに足るが、その後の輪住についてはほとんど明らかでないのが実情といえよう。

最終的には茂林の法系が近世に続き、『住山記』では八十一番目の天叟寿覚を「特住始 世牌第六世」としている（現在は独住一世・世牌六世と数えている）。したがって洞松寺では、

「世牌」でいうと五世崇芝——六世天叟と認識されていることがわかる。このことは、月泉以降の輪住が「住山記」には、全て「前住」として扱われていることにも示されているように。

また、「舟木洞松禅寺住山歴祖伝」の立伝を見てみると、崇芝以後は、秀峰繁俊（前住七世）、禅庵繁興（前住十五世）、東庵周益（前住二十五世）、梁山全桂（前住四十六世）、能山字賢（前住五十八世）、賢室俊哲（前住六十六世・再住七十世・三住七十六世）、天室護俊（前住八十世）と載せ、六世天叟寿覺に続いている。この法系は、【表2】を見ると全て直系の嗣法であることがわかる。つまり「住山歴祖伝」と題してはいるが、近世の独住に直結している人物のみ記されているのである。その他の前住（輪住）は「輪次住山記」には列記してあるのだが、撰者梅岳は近世の独住に至る系譜を洞松寺の正統な流れと認識していたことがうかがえよう。梅岳の認識はすなわち洞松寺の認識であり、梅岳は「住山記」によって、従来「多有脱誤。或有錯間。」であつた洞松寺世代の整合性を取ることを試みたのである。

三、月泉性印伝における事例

崇芝性岱伝のほかにもう一つ、今回の訓註対象となつてゐる祖師で、月泉性印の場合を紹介する。月泉は崇芝の跡をうけて、最初の輪住として洞松寺六世とされている人物である。

月泉伝については、『聯燈録』のほかに、『延宝録』九、『諸祖伝』下が知られている。この三本を対照したのが、【表3】月泉性印伝資料別対比表である。

【表3】を見ると月泉伝の場合、「尾州福厳寺」系（延宝録『諸祖伝』と「濃州開元院」系（聯燈録）に、崇芝伝同様に二系統に分かれていることが明確である。開元院を中心とする事績は本稿訓註に譲るが、両者の異同は興味深い示唆を与えてくれる。

福厳寺は現愛知県小牧市にあり、開創当初は宝積寺と称した。開元院は現岐阜県瑞浪市にある。

まず、福厳寺系では、月泉の出自は「備中州舟木人」とある。洞松寺の同郷であり、洞松寺二世喜山性讃のもとで出家・得度した。その後四世靈嶽洞源に参じたのち、諸方歴参したとする。これに対して開元院系では、「洛陽官族大江氏」と貴種の出自であるとし、出生時よりの鞍馬寺毘沙門天との機縁を説き、比叡山で出家したとする。さらに諸方歴参してから洞松寺の喜山、次いで靈嶽に参じたとする。

次いで、大悟の機縁も全く異なる。福厳寺系では「洞山過水因縁」で大悟したとあるが、開元院系では、「万法帰一話」で靈嶽に大悟を得られず、再び歴訪し、濃州日吉にて「月落潤泉」を見て大悟、これを靈嶽に認められたとある。

また、福厳寺や開元院の開創について、福厳寺の開基は

「郡主西尾道永」（『延宝録』）で、開元院の開基は「州守金吾源頼元」である。西尾道永の人物については触れる余裕はないが、「郡主」（『諸祖伝』では「知縣」とあるように、いわゆる郡郷レベルの土豪や国人であることが想定される。これに對して「州守金吾源頼元」は美濃国守護土岐氏に比定される。当該期の土岐氏に頼元なる人物は見出せないが、有力守護大名の一つである土岐氏と、「郡主」西尾氏とは家格・階層が格段に異なる。土岐氏開基が事実であるかは別にして、そこに由緒を結び付けていることに意味を持つと思われる。

なお、開元院系では、野口里に茅（庵）を結んだことが記されているので、月泉が野口里に來たことは認めているが、これを福嚴寺の開創とはしていない。一方、福嚴寺系では、開元院開創についても触れているが、檀信徒に請われ開元院を開いたと、一文を付すのみである。

さらに、年代に關していうと、各伝記で錯簡が著しい。例えば、『延宝録』『諸祖伝』で福嚴寺の開創が文安元年（二四四）または同二年で、その後開元院を開いているのに對し、『聯燈録』では開元院の開創を永享十一（一四三九）年としている。また『聯燈録』の開元院開創は喜山性讚の示寂後のことであるはずだが、喜山はすでに嘉吉二年（一四四二）に示寂している。

以上を概観すると、出自から全く異なり、出家・歴參の様

子をみても、全く別人のような記述の相違である。開元院系の方が、大江氏の出自、土岐氏の開基など、福嚴寺系に比べて尊貴に描かれている面がある。

本来は、これら出自や開基の違いや、大悟の話の相違が持つ意味などについて検討するべきであろうが、本稿では此正を承知で省略する。崇芝伝のように法系上の問題まで触れることはできなかったが、月泉伝にも嶺南の資料選択の態度が反映されていることは明白である。しかし、そのために時系列的な整合性が破綻してしまっていることは否めない。付記すると、崇芝・月泉とともに洞松寺歴代に数えられている人物だけに、洞松寺との関連性も興味深い。

四、むずびにかえて

— 『聯燈録』編纂姿勢とその背景 —

原田弘道氏は「『日本洞上聯燈録』開板を遶る諸問題」の中で、「嶺南秀恕にしても、徳翁良高の後を承けて『聯燈録』を編纂したことは、曹洞宗門の歴史的法統を明確化して一師印証を正当化することに意図があったと見ることができ」と述べている。

洞松寺の例を見るに、崇芝性岱は洞松寺五世として、歴住に掲げられているが、最終的な法系譜からは傍系に当たる。

嶺南は、『聯燈録』で崇芝を石雲院開山として立伝した以上、

直系ならともかくも傍系として晋住している洞松寺についての記述は避けなければならなかった。洞松寺の法系は（嶺南の頃は独住六世碧峰桃巖の頃だが）、茂林芝繁—秀峰繁俊—禅庵繁興—東庵周益—梁山全桂—能山字賢—賢室俊哲—天室護俊の系譜を経て碧峰に至るものでなくてはならなく、その間にある直系でない崇芝は削除されるべき存在であった。洞松寺（梅岳慧香）の立場は、『住山記』序跋に見えるように、『諸祖伝』『重統諸祖伝』に拠るもので、これは嶺南が崇芝伝に採録しなかったものである。如何に梅岳が精緻な検証のもとに『住山記』を記したとはいえ、嶺南とは対立する立場であった。

このことは、嶺南が認識していたと思われる「師承関係が伽藍相統を前提としていたという歴史的事実と、宗統復古を経過した後の一師印証・師資面授を前提とする歴史像とのズレ」²⁶、ならびに「嶺南の描く法系譜として必ずしも歴史的事実と合致しないのかも知れない」²⁶ことと一致する事象であるう。

このことは月泉性印伝でも同様のことが言える。崇芝性岱のように法系上の問題まで検討することはできず雑駁ではあったが、『諸祖伝』の福巖寺に対して、『聯燈録』では開元院を主張する必要があったことは明らかである。

このほか、大年祥椿章訓註3に見られるように、重嗣の事

実に取捨を加え、一方の師のみを採択した場合も可能性してあるだろう。

宗統復古については、本稿では述べる余裕はないが、同時期には、一師印証・師資面授を標榜した宗統復古を背景とした法系譜の正当性の争いが根底にあったことは推測できる。『聯燈録』崇芝伝からは、こうした宗統復古の思想が垣間見え、嶺南の姿勢がうかがえよう。

嶺南自身は『聯燈録』凡例の最後、すなわち本文叙述の直前にこう語っている。

一、此書専採機縁語句。略載事跡。儻有所差舛。尚乞大方郢政。至於寺院濫本末謬法綱。而有中外生隙闕牆事。宗門特有條章旧例。可以為矜式焉。不必拘此書云。（一、此の書、専ら機縁語句を採りて略して事跡を載す。もし差舛する所有らば、尚お大方に乞う、郢政したまえ。寺院本末を濫り法綱を謬て、中外隙を生し牆に闕ぐ事有るに至ては、宗門、特に條章有り、旧例有り、以て矜式と為す可し。必ずしも此の書に拘らざれと云う。）

『聯燈録』研究の最大の課題は、周知のように、開板禁止をめぐる問題であるが、こうした姿勢にも関わらず、従来の研究に従うと、嗣法問題に抵触し、それを不具合とする関三利の圧力が加えられ、結果的に開板禁止の処遇を受けてしまったのであるが、本稿では、『聯燈録』に潜む嶺南の編纂姿

勢と、同書が持つ性格の一面を、本文中の具体的な事例から提供できたのではないかと思う。このことと開板問題の関連も含め、今後の『聯燈録』をはじめとする燈史参究の一助となれば幸いである。

註

(1) 本稿中の『日本洞上聯燈録』の原文・訓読の引用は、『日本洞上聯燈録』の研究(一)、『駒澤大學禪研究所年報』第十五号、駒澤大學禪研究所、二〇〇三年)に拠った。

(2) 具体例については、前註(1)「二、『聯燈録』の成立」を参照。

(3) 嶺南の『延宝伝燈録』や『日域洞上諸祖伝』等の燈史に対する評価・批判等を、『聯燈録』凡例から抜粋すると、

一、洞上尊宿。有伝行世者六。曰元亨釈書。曰扶桑僧宝伝。曰延宝伝灯録。曰洞上諸祖伝。曰統諸祖伝。曰重統諸祖伝。此六書。凡立伝者亡慮二百五十員。所載互有詳略。或参異同。学者無知適従。予為参考之。亦有搜諸伝而輯編者。合之始終一貫。通計七百有余人。(一、洞上の尊宿の伝有りて、世に行うもの六つ、曰く元亨釈書、曰く扶桑僧宝伝、曰く延宝伝灯録、曰く洞上諸祖伝、曰く統諸祖伝、曰く重統諸祖伝なり。此の六書、凡そ伝を立るもの、亡慮二百五十員、載する所、互いに詳略有り、或いは異同を参じゆ。学者は適従を知ること無し。予、為にこれを参考す。亦た諸伝を搜して輯編するもの有り。これを合して始終一貫す、通計七百余人なり。)

一、釈書僧宝伝灯之所記也。醇謬相半。竄謬特多。諸祖伝足以為洞史之権輿也。其功偉矣。然以文献不足。而攻索不至。莽

鹵亦多。統伝為稍勝。又得重統相為羽翼。然亦未足矣。而今求之諸方。訛者正。闕者補。是出不得止。豈冒前功而為之哉。(一、釈書・僧宝・伝灯の記する所は、醇謬相半ばす、竄謬特に多し。諸祖伝、以て洞史の権輿と為るに足れり。その功、偉なり。しかるに文献足らざるを以て攻索に至らず、莽鹵も亦た多し。統伝、稍や勝れたりと為す。又重統を得て羽翼を相い為す。しかも亦た未だ尽さず。いま、これを諸方に求めて、訛るものをば正し、闕くるものをば補う。是れ止むことを得ずに出づ、豈に前功を冒してこれを為さんや。)

一、延宝伝灯一書敍世系明矣。洞上三伝不及之。所以或有先子後父者。或有兄弟易位者。又有不詳嗣承者。又有誤系嗣承。紊乱極矣。予先訂祖派図。蓋令知其品級也。而今復鹵列之。庶幾後人追次攷入。(一、延宝伝灯の一書、世の系を叙すること明なり。洞上の三伝、これに及ばず。所以に或は子を先にし父を後にするもの有り、或は兄弟の位を易うものあり。又た師承を詳にせざるもの有り。紊乱を極めぬ。予、先きに祖派の図を訂す。蓋しその品級を知らしめんとす。いま復た鹵列す。庶幾くは後人、次を追ひ攷入せんことを。)

などを記され、参考にすべき書にしながらも、不備・誤りが多いことを指摘して、『聯燈録』編纂に当たった姿勢を標榜している。

(4) 前註(1)「四、『聯燈録』の性格 嶺南秀恕撰『日本洞上宗派図』を手掛かりとして」。

(5) 前註(1)「三、『聯燈録』の刊行」に詳し。

(6) 前註(4)。

(7) 前註(1)「五、『聯燈録』読解の意義と課題」。

(8) 『延宝伝燈録』『日域洞上諸祖伝』『日本洞上聯燈録』等では、『崇芝性岱章』と表記するのが適当であろうが、本稿では記述の

統一を取るために一様に「伝」と表記する。

- (9) ただし、「岱和尚」など、第三者が崇芝に対して用いたとみられる表現があることから、崇芝自らの記述とするには疑問を呈する箇所もある。

- (10) 莊氏（庄氏とも表記）は備中国守護細川氏の守護代を務め、勢力を拡大した。元資の父莊駿河守（洞松寺殿桂室常久）は、喜山性讚に帰依し、喜山を請して洞松寺を中興したという。このことは駿河守の法名にも表れている。元資の時代には、延徳三年（一四九一）に守護細川勝久に下剋上を起こし、元龜二年（一五七二）に毛利氏に倒されるまで備中最大の勢力を誇った。洞松寺には、莊元資の発給文書として、文明六年（一四七四）八月二二日、康正二年（一四五六）八月二八日、年末詳の三通の寄進状があり、ほかにも莊一族の寄進状が多数伝わるなど、莊氏の菩提寺として厚い外護を受けた。また、洞松寺にある莊元資の墓と伝える宝篋印塔は矢掛町指定文化財となっている。（参考文献 藤原隆景編『洞松寺文書の研究』（南山荘、一九七〇年）、藤井駿・水野恭一郎共編『岡山県古文書集 第一輯』一九五三年、一九八一年、思文閣出版より復刻）『曹洞宗文化財調査目録解題集⁴ 中国・四国管区編』曹洞宗宗務庁、一九九七年、『日本歴史地名体系 第34巻 岡山県地名』平凡社、一九八八年、『角川日本地名大辞典 33 岡山県』角川書店、一九八九年、等）
- (11) 「茂林和尚行録」文明十二年（一四八〇）の「速来而住持洞松。（速やかに来たりて洞松に住持せしめよ。）」、同十三年の「宗芝便自遠州来。住持洞松寺。（宗芝便ち遠州より来たりて洞松寺に住持す。）」、同十四年の「師命本寺洞松当住岱和尚云。（師、本寺洞松当住岱和尚に命じて云く。）」などの文言から判断できる。なお、「茂林和尚行録」文明十三年の「檀那莊豆州元資公。

附論、嶺南秀恕の『日本洞上聯燈録』編纂姿勢の一側面

貴師道風其志丹誠也。頗如裴相国尊重黃檗運。（師の道風を貴ぶ。其の志丹誠なり。頗る裴相国の黄檗を尊重するが如し。）」の記述は、主語のみ代わって「宗芝岱和尚之行状記」康正元年の「信檀越勝間田氏。…」の記述にほぼそのまま援用されているように、両伝記の関連性が課題として残る。

- (12) おそらく延徳三年（一四九二）、石雲院に輪番を定め隠退した時までを指していると思われる（『淨牧院聯燈録』『淨牧院記』）。いずれにしても、文明十三年（一四八一）の洞松寺での事績については触れていない。石雲院に輪番を定めた置文については、崇芝性岱章訓註（24）を参照。
- なお、崇芝が石雲院にいた徴証を示す資料に、次のものがある。

- ① 文明十二年（一四八〇）七月二十日、石雲院において、法嗣辰応性寅に嗣書を授ける。（崇芝性岱嗣書付与状写）増善寺文書、『静岡県史』資料編7中世3、静岡県、一九九四年）
- ② 文明十八年（一四八六）四月、法嗣賢仲繁哲に竹篋を授ける。（崇芝性岱竹篋付与状）林叟院文書（同）
- ③ 延徳二年（一四九〇）、自己の頂相に自贊を加える。（崇芝性岱画像自贊）石雲院所蔵、（同）
- ①は増善寺（静岡県静岡市）、②は林叟院（同焼津市）に伝わる資料で、ともに石雲院近国の末寺の法嗣に与えたものである。
- ①は資料中に「於遠州石雲文室伝授之」と明記され、②③も石雲院にいる時のものと見るのが自然であろう。①は茂林より備中洞松寺の住持の要請を受けた年で、翌年には洞松寺に赴いている。したがって②の時期（文明十八年）までには、石雲院に戻っていたと思われる。また、③は石雲院伝来の資料であり、置文を定めた前年のものである。
- (13) 【表1】で文安六年（一四四九）を見ると、崇芝は茂林より付

法・伝授、あるいは住持の命を受けたと一樣に記されている。寺院名は記されていないので、その直前（嘉吉二年）に記されている「回洞松」（『延宝録』）、「帰洞松」（『諸祖伝』）「聯燈録」等の状況から、この時茂林芝繁の跡を受けて洞松寺に住持したと解される。ただし「舟木山洞松禪寺輪次住山記」によると、文安六年（宝徳元年）は茂林が靈嶽に洞松寺を譲つた年となっている。唯一『浄牧院記』に、「其頃茂林志繁和尚者。出渉上州館林茂林寺。而旅寓武州岡智足院也。崇芝和尚慕茂林和尚之道徳。而凡住当院十一歳也。（其の頃茂林志繁和尚は、上州館林茂林寺に outreach して武州岡智足院に旅寓するものなり。崇芝和尚、茂林和尚の道徳を慕いて、凡そ当院に住すること十一歳なり。）と記されている。「当院」は浄牧院を指すと思われる、『浄牧院記』に従えば、この時期崇芝は浄牧院に住していたことになる。「当院十一歳」は、文安元年（一四四四）の浄牧院開創から起算していると思われる、康正元年（一四五五）の石雲院を開創までに対応していると思われる。

(14) ただし『諸祖伝』は「嗣法一人。曰大空玄虎。」で終えているが、『洞松寺住山記』崇芝伝は「嗣法七人。曰大空虎。賢仲哲。界巖悦。季雲岳。辰応寅。大有宗。隆慶紹。」する。これに続いて「舟木室中口授曰。輪番初住権与于此師。一坐十二年。然年月等分明不記矣。後遠州石雲一派容師肖像。投入牌料。而安本山第五世焉。」と記す。なお、『聯燈録』も嗣法七人としてこのことから、嶺南が『洞松寺住山記』から情報を得ていたことが推測できる（崇芝の法嗣については崇芝性俗章訓註（26）参照）。

(15) 茂林初住の後、崇芝が洞松寺を嗣いだ可能性もあるが、この時期の崇芝の住持地については判然としない。前註（13）参照。
(16) 靈嶽洞源の示寂年については、長禄二年（一四五八）と延徳三

年（一四九一）の二説がある。「舟木山洞松禪寺住山歴祖伝」靈嶽伝では後者としている。〔表3〕欄外註を参照。

(17) 茂林は崇芝への書状で「伝靈嶽与崇芝外。別更可無印可人。豈二言乎。」と述べている。靈嶽（靈嶽等都）は、すでに文明二年（一四七〇）に示寂しているので、自分の跡を継ぐ者は崇芝のみということであろう。靈嶽等都については前号（『日本洞上聯燈録』の研究（二）——巻第七所収諸伝訓註（その一）——、『駒澤大學禪研究所年報』第十六号、駒澤大學禪研究所、二〇〇四年）靈嶽等都章訓註参照。

(18) 「舟木山洞松禪寺住山歴祖伝」靈嶽伝には、「晩期建于全応寺、東三成神石山。為憩居地。（晩に全応寺、東三成神石山に期建して、憩居の地と為す。）とあることから、靈嶽はこの頃近隣の全応寺に閑居していたことが想定される。あるいはすでに靈嶽が示寂していたことも考えられる（前註（16）参照）。

(19) 茂林伝は『浄牧院聯燈録』『延宝録』『諸祖伝』『聯燈録』、靈嶽伝は『重統諸祖伝』『聯燈録』をもとに記述し、示寂年は「舟木山洞松禪寺住山歴祖伝」に拠った。また『禪学大辞典』（大修館書店、二〇〇三年新版第七刷）も参照した。

(20) 前註（14）参照。

(21) 月泉伝については、月泉性印章訓註（4）を参照。ほかに『月泉性印禪師行状記』（福巖寺所蔵）があるが、今回は閲覧するに至らなかった。本資料の読解による月泉伝への新たな視点を期したい。また本稿中に揚げた「輪次住山記」の記述も参照されたい。

(22) 月泉性印章訓註（28）参照。

(23) なお、崇芝以降の洞松寺歴住で燈史に採録されている者には、月泉性印のほかに七世秀峰繁俊（茂林法嗣）、九世大空玄虎（崇芝法嗣）がいる。秀峰は『聯燈録』に、大空も『聯燈録』『諸祖

伝』に採録されているが、いずれも洞松寺に関する記載はな
い。

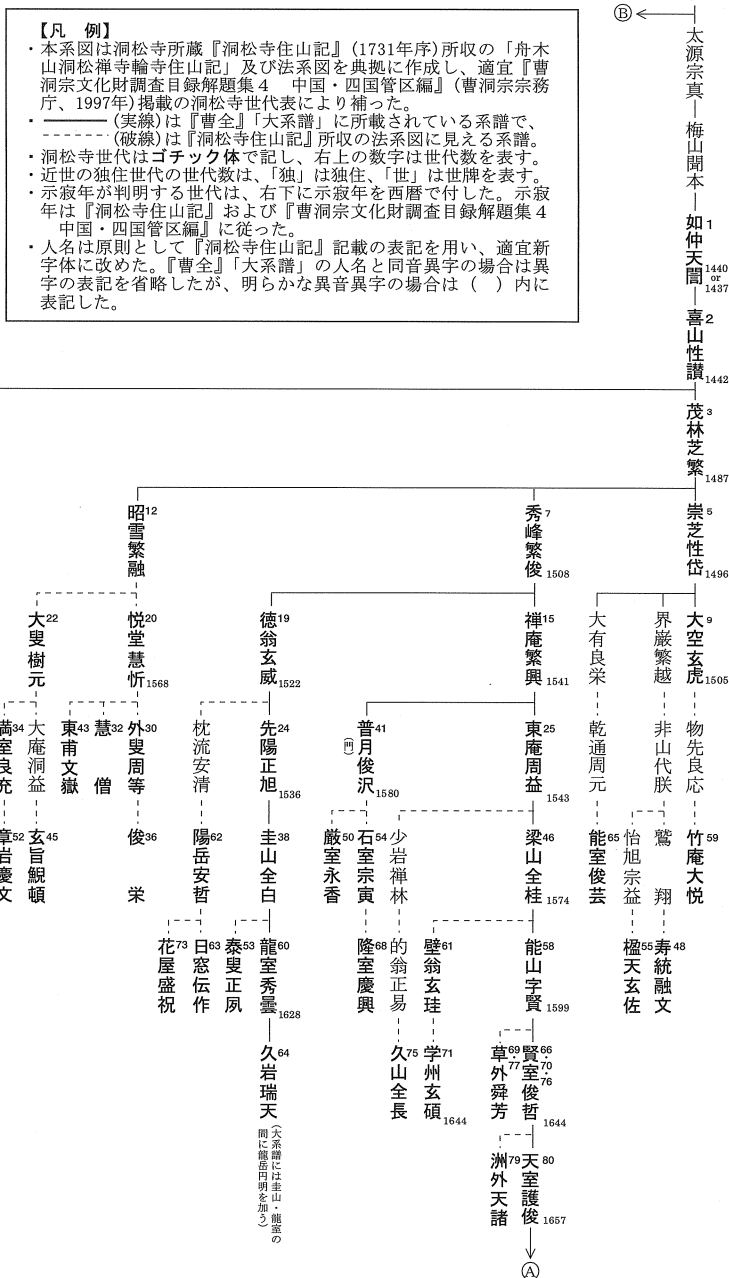
(24) 前註 (4)。「駒澤大学佛教學部研究紀要」第五十七号、一九九九年。

(25) 前註 (7)。

(26) 前註 (5)。

明応5 1496	延徳3 1491	文明14 1482	文明13 1481	文明12 1480	寛正元 1460	長祿2 1458
83	78	69	68	67	47	45
		<p>同十四年正月十一日。師（茂林は）命本寺洞松当住俗和尚云。我已盈九十而雖在世辭世上事矣。一跡相統上者門中公役可然律可被沙汰。為百年後無猶豫。我直書一通狀。以之門中僧徒可無疑者也。總我宗者心宗也。資師相統人者。以心伝心而宗也。凡之徒者以語伝語故趣也。為趣背宗者大罪也。仏在世迦葉微笑者心也。故以心伝心宗也。八万大衆驚耳目。故弥遠心。今亦如是。得宗者為得。得趣者不可背得宗者命也。自親把筆而書之。</p>	<p>文明十三年。檀那莊豆州元資公。貴同文明十三年。禮如妻相國重貴。師道風其志丹誠也。願如妻相國重貴。壁蓮命近人千余。抽金銀之世財。以造花麗之寶殿。号師塔頭。人皆一世希有事。</p>	<p>文明十三年。師重馳書云。後來学徒志。乾慧而我慢邪覺增上慢而。豈有得印可証明者乎。加之我在仏陀等時。馳書頃。以曾今日。伝重繼与崇芝外。別更可無印可人。豈三言乎。今当寺已及断絶。願余命之中來住持矣。宗多便自遠州來。住持洞松寺。衆盈三百。</p>	<p>文明十二庚子年。（茂林は）馳書示俗宗芝云。予年已八十。仏入滅増七年。不期今明日也。速來而住持洞松。岱宗芝辭云。我文安已已受印可。以來二十一年也。後來豈無勵志者乎。若有命之令為住持。余已年過耳順所不欲也。</p>	
	<p>延徳三辛亥歲。師齡七十八歲而隱居探老翁。自從延徳三辛亥年三月一日於輪番已出。如無環端。似抽繭絲。応世主勝出俗靈相繼傑出也。大源正脈源既深淵。到如今流不短淺者也矣。</p>					
	<p>師明応五丙辰年十月廿七日。安然而化。壽八十三也。門弟子。塔舍利於龍門山南角了也矣。</p>					
	<p>抑亦石雲院輪番者。維時從延徳三辛亥歲初也。（中略）崇芝和尚退石雲院。從隱居探老翁。經五年。</p>					
	<p>至明応五丙辰歲十月廿七日。壽八十三而不寂也乎。</p>					
	<p>明応五年十月二十七日寂。</p>		<p>文明十三年。豆州太守藤元資。又創建精藍請師。又開遠之石雲。</p>			
<p>明応五年十月二十七日。安然而遷寂焉。嗣法人。曰大空玄虎。</p>			<p>文明十三年。豆州太守元資。慕令德。大興造伽藍。且割膏腴之地。資常住。自後道光益顯著。座下常遶龍像三千余指。遠之石雲亦師誦之。</p>			
<p>明応五年十月廿七日長逝。有七人。</p>						

【表2】洞松寺歴住法系図



【表3】月泉性印伝資料別対比表

『延宝伝燈録』九		『日域洞上諸祖伝』下	
尾州大叢山禪殿寺（初号宝積）月泉性印禪師。備中州舟木人。	福嚴寺月泉印禪師伝。師諱性印。号月泉。備之中州舟木人也。	濃州開元院月泉性印禪師。洛陽色族大江氏子也。母某氏。棒子較馬多聞天男。時季五手。逾三七日。果服之。出毘沙門金像。宗族松真。自幼秀穎。經書過目。輒成誦。偶見死屍九變相。神智渙發。父母察其志投叡山首楞嚴院。祝髮受具。深探顯密奧旨。充然有所契。稿竊稱參詣尊宿。過備中洞松。參喜山老人授以法。婦一詁。服勤聞戒。	
幼入洞松就喜山鬘髮得度。	喜山和尚于州之洞松寺而出家。	山嶽没（嘉吉二年・一四四二）召師依靈鑑。	
依靈岳。出遊諸方再參靈岳。	山入寂（嘉吉二年・一四四二）。靈岳源禪師補席。師亦依事之。有日辭遊歷諸州。參請知識。皆無所契。帰請益于源。	嶽間曰。汝久參先師處。有何指示。師曰。万法帰一。嶽曰。汝如何會。師曰。南山雲起北山雨。嶽斥之。師拜求指示。嶽曰。吾這裏無一滴。莫來澆泊。師擬開口。嶽劈口掌之。	
岳令看洞山過水因緣。一夕入寺後山禪坐石上。見嶺月印寒水。瞥地悟入。岳付印記。且囑曰。始卒能守自然心地乎。師曰。自是忘山林。無忘世之念。	源示以洞山過水之因緣。師寅夕提撕至廢寢食。文安甲子（元年・一四四四）十一月一夕獨入寺後之山中。禪坐石上。少焉月上東嶺影印寒泉。師一見頓了玄旨。即入函丈通悟由。源徹詰數回。師應對無凝滯。源証之。仍以月泉号之。源又曰。但是得易守難。自能守之久。自然得心地乎。師禮拜。自是忘山林。無忘世之念。	久之辭去參諸方。首上永平。耕雲大洞無不踰徧。造尾闕月江於楞嚴。過夏。到野口里結茅而居。	
文安初（四四四）。寓尾之野口。郡主西尾通水。創建寶積寺。延師開法。	文安二年（二年・一四四五）源有遠州之行。師隨行。帰路告辭入山中。求止錫之地。	至尾之野口里。相地形之勝。結茅寓止。曠然自適。時知縣西尾氏通永。偶見師安禪靜居。甚仰慕之。遂創建梵刹居之。名曰寶積禪寺。始啓叢席。供乳香於源。自是細素崇尚。豐華煥燁。	
	時源入滅（※）。盛禪與公持源之道。至。師開封湛然。爽因依止教終矣。師遷依衣統席。自退庵居于山後。猶厭人緣近。	無何避乱。入濃之日吉郷。見山川奇趣。欲老生於此。憑樹縛蘿蘿。潤飲水食以度日。永享戊午（十年・一四三八）三月入山跌坐。見月落洞泉。豁然領悟。徹見靈嶽之用處。往觀靈鑑。嶽迎笑曰。且喜。大事了畢。因結師号月泉。付以金襴袈裟。永亨己未（十一年・一四三九）。州守吾源頼元（祇氏。）就其所禮。師創梵刹。扁曰應果山開元院。	
又応禮請渡之日吉開開元院。	復行至濃州日吉。卓庵于山中居焉。綠德香莫掩。檀信景仰。創院立之。号開元。	嘉吉癸亥（三年・一四四三）。始開堂。拈香識靈嶽之嗣。有旨苾蓀持。尋謝事帰開元。	
文明二（四七〇）年十二月二十八日。遺誡大衆。俄然唱滅。	住止幾示微恙。唱曰寂。時文明庚寅（二年・一四七〇）臘月二十八日也。薨。其老幼哀号。門弟子收遺骸。塔于本山。師示寂後。與改室稱号福嚴。	文明二（四七〇）年庚申臘月將順旦。喚洞冥嗣後事。書偈而逝。是月廿八日也。壽六十三。奉全身塔于本山。嗣法盛禪。周牧。乾山。龍宗。玄正等。卓庵於本山東西羽翼相庭焉。	

※靈鑑洞源の示寂年については、長祿二年（一四四八）と延徳三年（一四九一）の二説がある。前者だと洞松寺の再住・三任期に合致せず。後者では「諸祖伝」の「時源入滅」の二説がない。

※底本に適宜句読点を補い、新字体に改めた。
ゴシック体は年代、またはそれを示す語句。
ただし本表では、各資料で年代の相違が著しく、統一した年代が示せないため、年代の欄は設けなかった。
（ ）内は割注。

『日本洞上聯燈録』七